
この世に二人きり

馬河童

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

この世に二人きり

【Nコード】

N1026E

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

オクテな高校生のちよつと変態チックな恋愛&妄想ストーリーです。昔に書いたものを修正しつつ、連載形式で載せます。ダラダラ長いですが、わりとスイスイ読めるのではないかと思いますので良かったらどうぞ！

その1（前書き）

私のある人生の転機を機に、知り合いに一作品披露しようと思いきりギリギリで書き上げたのがこの作品である（それを加筆修正しながらここに連載したものです）。

ハッキリ言って大したストーリー性もなく、どちらかと言えば書きたいことをダラダラと書き連ねたような作品である。よって、面白いかどうか自分でもさっぱりわからない。

とはいえ、せっかく書いたので、一人でも多くの人に見てもらえれば幸いです。ただし、普通に卑猥なシーンもありますので御覚悟を！

ちなみに何処にも投稿等はしてません。

その1

「10月20日木曜日の特ダネワイドショーです！」

テレビから司会者が呼び掛ける声が聞こえ、僕は8時を過ぎた事を知った。とても眠いが、無理矢理にベッドから跳ね起きる。

毎日遅刻寸前の僕は今日もバスに乗り遅れそうになった。朝起きられない原因は夜更かしだということはよくわかっているのだが、どうにも止められない。つい深夜番組を見てしまったり、やりかけのTVゲームにのめり込みだりしてしまう。

こんな調子だから目を覚ますのはいつも8時近くだ。朝飯を食べる暇などなく、歯ブラシをくわえながら学生服を着ると、一目散にバス停へ駆け出す。そんな毎日だ。

今日乗ったバスは、遅刻するかしないか微妙な時間帯のものだ。だが、意外と同級生も乗っているもので、一人でも見知った奴がいると安心感が増す。

車内の混み具合は大したことがなかった。席も空いており、僕は後方の日の当たる席に座った。それから周囲を見回したが、知り合いはおるか学生すら一人も乗っていなかった。僕は少し気分が憂鬱になる。また担任の柳沢に嫌みを言われるのかと思うと、気が重い。遅刻して小言を言われるのは自業自得なのだが、皆の前で恥を掻かされるのが何より辛い。いや、皆という訳でもないのだが…。

幾つバス停を通り過ぎたのか、バスが久しぶりに停車した。乗客が乗ってくる。その様子をちらと振り返った僕は、思わずドキンとした。それは単にウチのクラスの生徒が乗ってきたからではない。その生徒が中川美和だったからだ。

中川美和、彼女がこんな時間のバスに乗ってくるのが信じられなかった。優等生とまではいかないが、遅刻などする子ではないし、何より僕の乗るような時間のバスでは一度も見掛けたことがなかった。

まあそんなことはどうでも良い。僕が動悸を感じたのは、彼女に特別な感情を持つているからだ。顔はかわいくて僕好み、性格も良さそうだ。この「良さそうだ」というのは情けない話、僕はまだ彼女とまともに話した事がない。ただ、いつもにこにこと友達と楽しそうに話していること、女子バスケット部でキャプテンをしていることなどを考えると、人に嫌われるような子には見えない。僕もあいさつでニコリと会釈されて、一辺にときめいた。遅刻して、柳沢に皆の前で辱められるのが嫌なのも、彼女にそんな姿を見られたくないからだ。

中川は僕が座っている前の方に歩み寄って来る。彼女の足音と、僕の心臓の鼓動が早くなって重なった。近くに来るかと思うと、緊張感が増す。

だが、そんな感覚も瞬時に消え去った。中川は僕になど見向きもせずに、さらに前方へ行ってしまった。

声を掛ければ良かったのだろうか？じっと運転手の近くに立っている彼女を見ながら、後悔の念ばかりが浮かんできた。どうにも出来ないもどかしさが全身を包んでいた。

情けない僕は、こっちに気付かない中川に何度も目線を送った。後ろから見ているだけでも、さっきの後悔を忘れて幸せな気分になった。僕は今までに何人も女の子と付き合ったことがある訳ではないので本当かどうかはわからないが、常に彼女を取っ替え引っ替えしている友人の服部によると、

「女とは好きになって、付き合うまでが楽しいのだ」

と言う。何故なら

「自分の思い通りにならないものをどうにかする過程が一番面白いのであり、それが手に入ってしまったえば緊張感はなくなり、むしろ面倒な事の方が多くなる」

とのこと。「手に入ってしまったば…」以下の事はまだわからないし賛成しかねるが、今自分が抱いている感情は「付き合うまでの楽しさ」なのだと理解出来た。

僕は中川を見ながら彼女とうまくやる様を想像した。この後、バスを降りるところで声を掛けて、教室まで一緒に歩いて行く…。どうにかして笑わせて、自分を印象付けたい。何て言おうか？

僕はこんな風に想像する事が好きだった。暇な授業中も、大概空想に耽っては良い気分になっていた。何がそんなに楽しいのかというと、何より想像の世界では自分の好きな事しか考えないからだ。嫌な事・ダメな事などは、想像力の前では無力なのだ。今、僕と距離がある中川だって、想像力を駆使すればどうにでも扱える。

だからといって僕も想像の世界が全てだとは思わないし、そこに逃避する気もない。現実やはり重要だし、それだからこそ中川に近付けない自分にもどかしさを感じているのだ。

要は現実を想像の世界に近付けるのが理想の状態なのだろう。「夢をかなえる」「夢を現実にする」などの言葉は、まさにそれだと思っ。

不意にバスが止まった。気付くと学校前の停留所だった。前を見ると、中川はお金を支払い、出口のタラップを降りていた。

僕も慌てて座席から立ち上がり、運転手の脇へ行った。ところが定期が見つからない。僕があちこちと身体をいじり回すのを見て、運転手が怪訝そうな顔をしている。さらに背後から刺すような視線も感じる。車内は空いてるとはいえ、急いでいる人もいるのだろう。僕は居心地の悪さを覚え、仕方なしに財布から現金を取り出し、料金箱に入れた。

悪いことは重なるもので、バスを降りた時にはもう中川の姿は見えなくなっていた。僕は何とも面白くない気分のまま、教室までダツシュした。

僕が校門をくぐり抜けた頃、チャイムが鳴った。生徒は周囲に一人も見えなかった。僕は焦って教室までの3階分の階段を駆け上った。教室の前に着いた時には、運動による汗か、それともこれから叱られることへの冷や汗か、とにかく汗をびっしょりと掻いていた。教室内は既に柳沢も来てホームルームが始まっているようで、生徒

この世に二人きり

の騒ぐ声など聞こえず、静まり返っていた。

多分嫌みの一つも言われるんだろうな、そう思うと部屋に入るのは気が引けた。だが入らぬ訳にもいかないのです、意を決して後ろ側の扉をそーっと開けた。恐る恐る顔だけ室内を覗き込んで見る…

その2

「明日は…だから…皆も…ように…」

何と幸運にも、柳沢は喋りながら黒板に何やら書き込んでいる最中だった。しかも僕の机は列の一番後ろにある。僕は忍び足で自分の座席に向かった。ゴールへの距離はあとわずか。僕は柳沢に気付かれずに席に到達することが出来た…

かに見えたが、奴はそんなに甘くはなかった。

「みい〜かみい！お前、何こそそと後ろから入り込んでるんだ！」

「は、はい…」

呼ばれて僕は立ちすくんだ。黒板に向かっていているかと思いきや、柳沢は僕の侵入に気付いていたのだ。

「お前、また遅刻か。何遍言ったら分かるんだ」

小言が始まった。同時に皆の視線が僕に集まる。浴びる必要のないスポットライトが、僕を照らしていた。

「こつ何度も遅刻してくるようだと、罰でも与えにやらんな」

「そ、そんな…」

「当たり前だろ。皆の、集団のルールをお前が守らないんだから当然のことだ。おい、今日は仕方ないから歌でも歌え」

「歌…ですか？」

「おう、皆の前で少しは恥ずかしい思いをしてみる。そうすれば少しは反省するだろう」

柳沢がそう言うと、一斉に拍手が沸き起こった。皆も僕の歌声を聞きたいようだ。これは引くに引けない状況になってきた。柳沢の奴、本当に意地が悪い。

こつなりややるしかない。僕は覚悟を決めて歌い出した。

「め〜だ〜か〜の学校は〜川の〜中〜つ。そ〜つと…」

瞬間、僕は歌を止めた。中川が僕を見て、笑っているのに気が付いたからだ。恥ずかしさで一杯になり、一瞬にして顔が熱くなった。

「おい、何やってんだ。途中で止めてんじやないよ」
柳沢が偉そうに腕組みしながら言う。

「は、はい…」

僕の腸は煮えくり返りそうだったが、仕方がないので歌を続けた。おそらく怒りと恥ずかしさで、顔は真っ赤だっただろう。あまりよくは覚えてないが、僕は「めだかの学校」を熱唱したらしい。

「よっ、お疲れ様」

ホームルームが終わり、僕はクラスメイトに次々に声を掛けられた。クラス全員の前でオンステージを行った事は、良かれ悪しかれ皆の話題の一つとなっていた。友人達は同情したり、笑い話にしていたし、女子などは半分笑って、半分呆れ返るような仕草を見せていた。

「しつつかし柳沢の野郎、嫌な真似しやがるぜ」

と同情するように言うのは、服部だ。

「ホント、歌は参ったよ。恥ずかしくてたまらなかった…」

「真っ赤になってたもんな。でもめだかの学校はウケたぜ。みんな笑ってたしな。一躍人気者だぜ」

「そうか？逆に一気に株が落ちたような気がするんだが」

「バーカ。元々そんなに高い株価じゃねえだろ。今日の歌で、逆に一部には面白い人って認識されてるさ」

「ふーん。そんなものかねえ」

何処まで本気かわからないが、確かに女を弄んでる服部の言うこととは一理あるような気がした。

「ちなみに誰か気になる奴でもいるのか？」

「い、いや別に…」

こういう事への服部の嗅覚は鋭い。僕は自分の気持ちを知られるのが気恥ずかしいので、とにかく隠し通す気でいた。だが、

「阿部か？いや金井か？それとも篠田？」

服部は次々に名前を挙げて、追及の手を緩めない。

「違つて。何も無いよ」

「鈴木か？あ、中川もいるか」

その名を聞いた時、僕の表情が変わつたのを服部は見逃さなかつた。

「そうか、中川かあ」

「そんな、違つて」

必死に否定するも、僕の顔は熱く火照つており、正解は一目瞭然だつた。

「いいじゃねえか。いい女だと思うぜ。お前が狙つてないんだつたら、俺がどうにかしたいくらいだ」

このセリフからもわかるように、彼にはなかなかの男気がある。女たらしといえど、僕が友達付き合い出来るのも、服部のそんな人柄だからだろう。

「内緒だぞ。誰にも言うなよ」

僕は右手の人差し指を立てて「しーっ」とやった。

「分かつてるよ。言う筈ないだろ。それより、確か中川は男いねーぞ。一丁勝負掛けてみるよ」

それを聞いた瞬間、僕は嬉しいような安堵するような気分になつた。

「何にやにやしてんだ？」

と服部に言われるのも無理のない事だつた。中川に彼氏がいるかどうかは、ずっと気になっていた。それが服部の情報により「いない」と判明し、嬉しくない筈がない。

この情報のお陰で、僕は柳沢に歌わされた事など忘れて、楽しい気分で一日を過ごせたのだつた。

その3 (前書き)

若干、汚らしい描写があるので注意が必要です！

この世に二人きり

僕は帰宅部で忙しい（余談だが、たまに校内の部活の掲示板にふざけて「帰宅部 なし」と書くバカな奴がいるが、帰宅することが部活動である以上、「なし」となれば帰宅部員は帰れないのだ。だから帰宅部は毎日活動があつて忙しい）ので、4時過ぎには家へ帰る。部屋に入ると、そのままベッドに寝転んだ。毎日寝不足気味なので、家ではついダラダラとしてしまう。このままウトウトして眠ってしまうこともよくある。

寝転びながら思い浮かんだのは、中川の顔だった。今日、服部から彼氏がないと聞いてどんなに嬉しかったことか。僕は過去にも何人かの女の子を好きになった経験があるが（ちなみに彼女いない歴は18年だ）、大抵彼氏がいるとか、他に好きな人がいるなどと聞くと、気持ちが悪えてしまうのだった。何故ならその別な男に比べて自分が優る自信もないし、強引にアタックして勝てる気もしなかったからだ。そんな訳で、中川に男がないという情報は、僕を奮い立たせるに十分なものだった。

寝転んでいる内に気怠なってきた。僕は半分眠りに落ちそうな心地よさに浸っていた。そんな僕の右手はいつしか下半身に移動していた。

僕は結構早くからマスターベーションを覚えており（最初にしたのは小学校5年生の時だった）、ベッドで寝転びながらするのが好きだった。服部などはもっぱら本や映像で行為を働くらしいが、僕は違った。基本は想像だ。

厳密に言つと、さっき中川の事を考えていた時から、手は自然と定位置にあつたのだ。いじる事が気持ちいいと知った日から、ベッドに入る度に僕の手は半ば無意識に陰部へ行きがちだ。最初は指で弄ぶように触れ、大きくなると共に強く激しく手を動かしていく。

この時、頭の中は妄想で一杯か、空っぽのどちらかだ。妄想が膨ら

んでいる時はいじり方も激しさを増す。とにかく快樂追求の割合が濃くなる。

逆に頭が空っぽの時は触っている意識すらないので、手にほとんど力が入っていない。たまに気持ちよさから力が増してきて、我に返ることがあるくらいだ。

話が逸れてしまったが、今の僕は中川の事を考えながら、右手を動かしていた。それは僕の頭の中で構築された勝手なストーリーで、中川に告白された僕が彼女にキスして行為を行うというものだった。僕が考えている話なので、全て思い通りに事が運ぶ。中川は僕の言う事に一切拒絶しないし、彼女の性格や身体付きまで、全て思うがままだった。

僕が中川に触れ、全裸の彼女と結合する事を想像する時、手の動きは一層激しくなる。中川と合体するなどと考えただけでたまらなくなり、僕は欲望を吐き出してしまふのだった。僕の薄汚い持ち物が清楚な中川の体内に入るなんて現実離れもいいところだが、頭の中の世界ではそれが頻繁に行われていた。

気持ちいい……。僕は思い切りティッシュに向かって放出し、余韻に浸った。だがそれは刹那の事で、すぐに倍以上の虚しさが襲い掛かって来る。僕は頭の中で確かに中川と抱き合い、性交した。しかし終わった気怠さの中で現実に帰ると、当然の如く彼女は隣にいない。僕は一人で下半身を露出した情けない姿でベッドに横たわっている。

この虚しさを掻き消す方法はただ一つ、放出感に浸らずにすぐさまもう一度行う事だ。幸い僕は若いので連射が効く。そうすれば中川も僕の頭に帰って来る。

それにこの利点はもう一つある。連発することで、身体はぐったりとし、眠気が襲ってくるのだ。寝てしまえば虚しさも関係ない。悪夢さえ見なければ、僕の勝ちだ。

今日も僕は三回目を終えて眠くなった。まだ夕飯を食べてないが、そんなことはどうでも良くなるくらい眠かった。これも気持ちよさ

に身を委ねる行為の一種と考えれば、それに従うのが利口である。僕は誘われるまま、意識を失っていった。

気が付くと朝だった。いつもは聞こえる鳥のさえずりがなく、静かな朝だった。一体何時間寝たのだろう、既に太陽は明るく照つて、昨日カーテンを閉め忘れた窓から強い光が射し込んでいた。時計を見ると、なんと八時五分。僕は慌ててベッドから跳ね起きた。

階下に行くと、既に家族は誰もいなかった。ウチは割合と個人主義で、働きに出ている両親も僕に構うことなどほとんどない。だから昨晚も夕飯時に起こしてくれなかったし、今朝もおはようの挨拶をすることもないまま出勤していったのだった。当然、朝飯など用意されていない。もっとも食べている時間もないので、僕は洗面所に行き、顔を洗い、寝癖を直し、歯みがきを済ますと、家を飛び出した。

家を出た僕は一目散にバス停へ走った。朝のダツシユは本当に辛い。学校へ行くまでにドツと疲れが出るので嫌なのだが、何故か僕の日課となっていた。帰宅部なのに運動を欠かさない自分を褒めてやりたいくらいだ。

バス停に着いた頃には全身から汗が吹き出し、シャツが肌にとわりついて気持ちが悪かった。前のバスが行ったばかりなのか、誰も並んでいなくて、待つのは僕だけだった。道路を見ると人も車も全く通っていない。この調子ならバスはすぐに来て、遅刻も免れるだろう、と勝手な予想をする僕だった。何せ昨日の独唱は堪えた。もう絶対にあんな事はしたくない。僕はバスが来るのを今か今かと足踏みしながら待ち続けた。

その4（前書き）

段々、変態になっていって恥ずかしいです。よくこんなのを書いたな…

この世に二人きり

その4

大して待たない内にバスは来た。駆け足で車両後部から乗り込み、僕は驚いた。朝のラッシュ時だというのに、誰一人として客が乗っていないかったのだ。こんなことは初めてだった。最初は気味悪さを覚えたが、先に行ってしまったバスに皆乗り込んで行ったのだと合点がいった。

僕は一番後ろの広々とした座席に腰掛けた。何処かの暗殺者ではないが、僕は結構神経質で、他人に背後を取られるのを嫌う。だからどんな状況でも極力一番後ろのポジションを取るように努力する。その理由を一言で言えば、人が後ろに立つと緊張するからだ。例えば混み合っている時のトイレなどは本当に苦手だ。便器に用を足そうと陣取っていても、後ろからのプレッシャーで出るものも出なくなる。イベント会場のトイレなどで小便しようとする、続々と後ろから人間が来て、僕の尿道はよく縮こまってしまふのだ。そんな時は用を済ませた振りをして便器から離れるのだが、よく後々の大事な場面で緊急を要することになるから困る。

それから全校集会などで後ろに並ばれるのも嫌いだ。窮屈感はもちろんのこと、自分の匂いが気になった。テレビが何かで「気になる体臭・口臭」みたいな特集をやっているのを見て以来、僕は自分の匂いが気になるようになった。実際、匂いなどしてないのだから、後ろに人が来るとどうにも気になるのだ。確かに臭いオヤジなんかは電車やバスにたくさんいるし、そんな奴には嫌悪感を覚える。その裏返しなのか、僕はいつしか自分の匂いに敏感になっていった。

もう一つ後ろが気になる理由がある。僕はよく腹痛に見舞われ便意を催すのだが、特に他人が後ろにいる時にこの傾向が顕著に起こる。こんな時は本当に苦しい。集会等の最中は抜け出すことも出来ない、ひたすら押し寄せる便意に耐えるしかない。その上、背

後に人間がいるので屁をこく事もかなわず、まさに八方塞がりの状態が続く。これは本当に辛い。

長くなつたが、他人に背後を取られるのを嫌うのは以上のような理由からである。そんな訳で僕は乗客ゼロのバス車内において、最後部四人掛けの席に悠々と座つた。他に客がいないことへの不安は少なからずあるものの、背後を取られていない安心感が多少なりともあつた。

そんなことを考えている内に、バスは結構進んでいた。僕は周りの景色を見てドキンとした。昨日、中川が乗ってきたバス停に近付いていたのだ。今日も彼女が乗ってくる確証など何処にもないのだが、それでも僕は緊張していた。

バスが止まつた。後部の扉が開くのは、乗客が乗ってくる証拠だ。僕はその乗客の姿を見て、心臓が止まりそうになつた。乗ってきたのは誰あるう、中川だったのだ。それも彼女一人だけ。彼女はタラップを上がるなり、前後を見渡した。

そんな中川の視線に、僕は目のやり場に困つた。あからさまに目が合うのも恥ずかしいし、そつぽを向いて気付かない振りをするのも寂しい気がした。

結果的に僕は目をそらしてしまつた。彼女と目が合った時にどういふ反応をして良いか分からなかつたのだ。服部あたりなら

「気軽に挨拶して、会話に持ち込めよ」

とか言つのだろうか、こんな時に気さくな話が出る自信はなかつた。

そんな僕の気持ちを知つてか知らずか、中川は車内の中程の座席に腰掛けた。僕は彼女の後ろ頭を見ながら、早くも後悔した。こんな風に二人きり（厳密に言うとなんか運転手も入れて三人だが、そんなのは空気がみたいなものだ）になれる機会はめつたにないのに、自分から逃してしまうなんて…。仕方なしに僕は彼女の後ろ頭をひたすら眺めていた。

そんな僕の頭に邪な考えが浮かんで来た。この後中川と僕が会話

をしてうまくいく、という想像だ。それを考えると僕の胸は期待で膨らんだ。いや、膨らんだのは胸だけじゃない。僕の分身とも言える一部分もすっかり膨らんでいた。僕は気持ち良くなってきて、妄想に浸りながら下半身をさすった。ポケットに手をつ込みながら、屹立したモノを握り締める。昨日、三度もした疲労など微塵も感じられない。むしろ中川を見て、いつも以上に元気があるみたいだ。

僕はいつしか必死に陰部を擦っていた。バレたらやばいのは百も承知だが、快感に抗う意志を持ち合わせていなかった。逆にバレたらマズいというスリル感が、手の動きに一層拍車を掛けた。

次の瞬間、僕は「うっ」という叫びを、二つの意味で同時に発した。一つは今にも放出しそうな「うっ」、もう一つは焦った時に発する「うっ」だった。何を焦ったのかというところでは他でもない、中川が僕の方を振り向いたのだ。

その5

僕は一瞬固まってしまった。幸いにして発射は免れたようだし、手の動きをはじめとした自慰的行為がバレている筈はない。しかしながら、その瞬間に自分の姿を注視されたことで、何となく行為そのものまで見透かされたような気がした。顔が火照るし、緊張感で身がすくむ。今の僕の顔は茹でダコのようになっているのではないか。

中川はしばらく僕を見た後、手を振って口を開いた。

「あら…、おはよう」

「お、おはよう…」

僕はドギマギしながら挨拶を返した。そして意を決して彼女に近付いた。このチャンスを逃したくない気持ちは勿論、僕と中川の距離は5m近く開いており、そのまま話しているのは不自然な気がしたのだ。

僕の胸は中川に聞こえるのではないかと思われるくらい激しく鼓動していた。全身が緊張感に包まれ、足は軽く震えていた。僕はそんな情けない様子を悟られまいと、早足で彼女に近付いた。

「や、やあ、お、おはよ…う」

開口一声、どもった調子になってしまい、僕は気恥ずかしくなっってしまった。

「おはよう」

中川は僕の様子などまるで気にも止めないようで、快活に挨拶を返してきた。

「立ってないで座ったら？」

言葉と同様、彼女の顔は着席を促していた。

「えっ…、ああ…」

僕は慌てて中川の後ろの座席に腰掛けた。心臓はまだ騒がしく音を立てていた。いざ目標に近寄ったにもかかわらず、何を話して良

いものか頭には浮かんでこなかった。そんな僕を尻目に、中川は話し掛けてくる。

「今日も遅いのね。また三上君の歌が聴けるのかしら？」

「いや、あの、その…」

「なぐんて言ってる私も今日は危ないわね」

僕の返事などお構いなしに彼女は喋り続ける。

「一緒に歌おうか？」

僕はドキッとした。冗談でも「一緒に歌おうか」などと言われるとは思ってもみなかった。こんな時、服部ならうまく話すんだろうが、僕は咄嗟に何と答えていいかわからず、

「あ、ああ、うん…」

などと情けない返事しかできなかった。そこで会話は途切れた。彼女も話を続けなかったし、僕も全く話し掛けられなかった。

僕の中で、沈黙による耐えきれない苛立ちが今にも噴き出しそうだった。元来、僕は無口な方ではなく、むしろおしゃべり好きな性格である。ところが女子を前にすると、まるで別人のように性格が変わってしまうのだ。

もっともクラスの中でも可愛くない方の部類に入る女子なんかとは気軽に話せた。要は中川などの一部の「いい女」に対してのみ、僕は怖じ気づいてしまっていた。彼女達の場合は、僕が変にいい所を見せようと気負ってしまうため、うまく喋れなくなるのだろう。沈黙に支配されたまま、バスだけがゆっくりと進んでいく。黙っている時間というのは案外長く感じるもので、僕には30分以上にも思えたのだが、バスが学校の二つ前のバス停に差し掛かったところを見ると実際は15分も掛かっていないのであった。

僕は後悔の念で一杯だった。せっかく中川と二人きりになる機会を作れたのに、そのチャンスを棒に振ろうとしている自分が情けなかった。かといって、この状況を打開するような気の利いた台詞は全く浮かんでこない。正に八方塞がり、イライラが頂点に達しようとしたその時、

その6

ピンポーンという機械音が車内に鳴り渡り、僕は総毛だった。

「あははは。何を驚いているのよ」

見ると中川が僕を指差し、笑っていた。

「降車ボタンを押したただけじゃない」

「あ、そ、そうか」

「三上君って天然？面白い」

「あ、いや。う…、まあ…ね」

急に会話が始まり、自分でも何を喋っているのかよくわからなかったが、彼女が「面白い」と言ってくれた事は素直に喜べた。

「あはは。それって自分で天然だって自覚してるって事？」

「う…、そ、そうだね。失礼いたしました」

僕は何とか会話のコードを頭に繋ぎ、話を続ける事が出来た。我ながら、ぎこちなさ100%で恥ずかしいことこの上ないが。

「え、前言撤回致します」

「あはつ、あはは。な、に、その言い方。ホントに面白いのね」

図らずも僕の言い方が余程面白かったようで、中川は腹を抱えて笑っていた。半分バカにされているのかもしれないが、結果的に彼女から笑いを誘えた事は嬉しかった。僕にとっては沈黙から笑いへの変化は、大逆転にも等しかったのだ。

バスが止まった。中川はまだ薄笑いを浮かべていて、ヘラヘラしながら出口へ向かって行っただが、突然

「きゃっっ…」

と叫ぶと、その場にへたりこんでしまった。

「どうしたの？えっ…」

ただならぬ雰囲気を感じ、駆け寄って見ると、目の前には僕も腰を抜かしそうな事態が起こっていた。

「ど、どうなってるの、これ…」

彼女がそう言うのも無理はない。なんとバスには運転手が乗っていないかったのだ。最初からいなかったのかは分からない。だが、今「高校前」のバス停に止まった時点で、運転席に誰もいないのは紛れもない事実。

「ひよ…ひよつとしたら、ここで降りる俺達しかいないからさ…、バス止めて逃げたのかもしれないよ」

あり得ない話ではなかった。運転手とて人間だ、職務に嫌気がさして、職場放棄する事だって充分にあり得る。運転手は僕達を降ろす為に降車ドアを開けてくれて、それからそつと逃げたに違いない。何よりも、無人バスなどというオカルトじみた説よりは、そんな風に思いたかった。

「そ、そうよね。でも何だか薄気味悪いわ…。早く降りましょ」

言うところ中川は金も払わずにバスから降りた。僕も一応ポケットの中で定期の有無を確認したが、出す必要もないだろうと思いつつ、そのままバスから飛び出した。

その7

僕達が降りた後もバスは微動だにしなかった。本当に不気味な感じがしたので、二人とも早足で学校の方へ向かった。

「ふーっ……」

バスが見えなくなり、僕は一息吐いた。中川の手前、格好悪いところを見せる訳にはいかなかったが、実は内心怖かったのだ。

「何だか気持ち悪かったわね」

中川もようやく顔に明るさが戻ってきていた。

「うん。何だっただらう」

「でも、三上君がいてくれて良かったわ。一人だったらと思うとゾツとするもの」

「そ、そう？」

僕は嬉しかった。期せずして彼女に良い印象を与える事が出来たのだ。少しはあの無人バスに感謝したくもなった。

学校の辺りは何故か静かだった。僕も中川も時計を持っていなかったので、正確な時間はわからないが、この静寂はどう考えても始業時間を過ぎているとしか思えない。

「あゝあ、今日は私も歌かあ……」

「俺は二日連続か……」

昨日のオンステージを思い出すと憂鬱な気分になったが、道連れが一名、それも極上の一名がいるので、多少は気が楽になった。

「うふふ、経験者がいると心強いわ。よろしくね、先輩」

「経験者って……、そりゃないよ……」

おどけつつも、気分は悪くない。今日ばかりは遅刻して大正解だった気がする。

僕達は正門をくぐり、正面玄関から校内に入った。外と同様、中も静まり返っていた。僕達は内履きに履き替え、教室へ歩いて行った。階段を登って3階まで行き、突き当たりの教室へ向かう。

それにしても静かだ。他の教室からも全くと言っていいほど音が洩れてこない。中川も不審に感じているようで、口には出さないが執拗に周囲を見回す仕草をしていた。

僕達の教室も物音一つ聞こえて来なかった。いつもの如く盛り上がらないホームルームをやっているのだろうか。柳沢が待ち構えていると思うと扉を開けづらい雰囲気だが、まさか「レディーファースト」などと言って中川に開かせる訳にもいくまい。僕は彼女の前に立ち、そつと後ろ側の扉を開いた。

「えっ……」

次の瞬間、僕は呆然と立ちつくしていた。

「どうしたの？」

後ろから中川が尋ねてきて、部屋を覗き込む。言葉は発しないが、彼女も驚きに支配された表情をしていた。そして口を開いて出た言葉は

「今日って日曜日じゃ……ないよね？」

「というものだった。」

「うん……」

確か10月21日の金曜日の筈だが、僕も返事をしながらその言葉に自信がなくなっていた。

僕達がこんな会話を交わすのには訳がある。そう、部屋には誰もいなかったのだ。柳沢も、服部も、その他大勢も、みんな部屋の中にはいなかった。

「何で……私達が遅刻したから？」

「そんな……筈はないよ」

僕は否定したが、誰もいない理由は全く分からなかった。

「じゃあどうして？」

「分からないよ、俺にも全然……」

「そんな……」

話している内に中川の表情は段々と沈んでいった。

「そういえば、他はどうなんだろう？」

こんな時、彼女を元気づける能力に乏しい僕は、話を逸らすためにも隣の教室に歩み寄った。

やはり隣の教室も静かだった。正直こここの扉を開けても、結果は同じような気がした。それでも僕は扉を開けた。もしホームルームでもやっていれば、ひんしゆくモノの展開だが、そんな心配は杞憂に終わった。

「ここもか…」

予想通り、部屋には人っ子一人いなかった。室内は座る者のない机がきれいに並んでいるだけだった。

「そんなバカな！」

僕は焦って、その隣も、さらにその隣の教室も調べた。しかし、結果は同じ。何処の教室にも、一人として人間はいなかった。

「中川さん、他の教室にも誰もいないみたいだよ…」

「そう…。もう、何なの、これ？」

中川は半分涙目になっていた。

「本当だよ…。今日は学校が休みの日でもないのに…」

不安なのは彼女だけじゃない。僕だって理由はわからないし、どうしていいかわからなかった。

「本当に誰もいないのかしら…」

「うーん…」

僕は考えた。

「そっだ、職員室は？」

「あつ、そうね。職員室、職員室へ行こう」

中川の顔が少しばかり明るくなったように見えた。そして、急ぎ足で職員室の方へ向かう。僕も慌てて後を追った。

職員室は2階にある。僕達は階段を駆け足で下り、学習教室とは別の棟に急いだ。この間も、誰かに会うことはなかった。だけど、二人ともそれは口にしない。今はこの先にある職員室に、人と希望が待っていることをただ信じたかった。

廊下を急ぎ足で歩き、僕達は職員室の前まで来た。僕よりも早く、中川がノックもせず扉に手を掛けた。彼女は普段なら絶対しないような派手な音を立てて扉を開く。

音が大きいように思えたのは、周りも室内も静寂に包まれていたからかもしれない。期待に反してと言うべきか、それとも予想通りと言うべきか、職員室にも人はいなかった。

「何で…」

中川の落胆は大きかった。そんな彼女を見ると、僕も何と声を掛けていいものか分からない。何より彼女だけでなく、僕自身の頭が混乱していた。遅刻は度々していても、未だかつてこのような状況に陥った事は一度もない。唯一の頼みの綱が切れたとなると、これからどうするべきなのか…。

「どうしようっ？」

不安に駆られている中川は目にうつすらと涙を滲ませて、問い掛けてくる。

「うん…どうしよう…」

僕もオウム返しのような応答しか出来なかった。目の前で女の子が困っているのに方策もなく、自分の未熟さが身に染みて恥ずかしいやら悔しいやら、いたたまれない気分だ。

しばらく沈黙が続いた。中川は俯いたまま何も言わない。僕は居心地の悪さを感じた。でも、ふと一つの事に気付いた。確かに気味の悪い状況だが、よくよく考えてみればこれはある意味物凄く幸運な場面なのではないかと。自分の好きな女の子と、こんな風に完全

な二人きりになれるチャンスなど滅多にないのではないか。少なくとも過去にこんな事態が起こった事はない。よし、だったらこの機会を生かしてやろうか。そう思い始めた時、

「ねえ…」

不意に中川が口を開いた。

「えっ」

思考を中断された僕は慌てて生返事をした。

「よくわからないけど、こんな所にいたくない…。帰ろ…」

「帰る…」

「嫌なの？」

「いや、そんなことないよ。そうだね。帰るか…」

この状況を少し良い方に思い始めた途端、これだ。確かに彼女の言う通り、こんな誰もいない学校に留まる理由はない。結局、現実には妄想と違い、いい方に転ばないことが多い。僕は経験上、それをよく味わっていた。

例えば想像上の中川なら僕の意志に反する行動は取らない。それこそ僕が妄想を愛する所以であり、現実で活躍できない理由である。

僕は長い渡り廊下を戻り、玄関へ向かった。中川は一刻も早くこの場を離れたいようで、駆け足に近いスピードで歩を進めていた。静けさに支配された空間に、僕達の足音だけが響く。

玄関は暗く濼んだ雰囲気が漂っていた。いつの間にか、外は大雨でどしゃ降りになっていたのである。こういう時は憂鬱な気分になったりするものだが、僕は内心嬉しかった。

「こりや凄い。大雨だね」

「私、傘を持ってないわ。ある？」

「ないよ…」

と言つて僕は外を見た。風雨は強烈で、校舎周辺の木々や看板を吹き飛ばしかねない勢いだ。

「じゃあ私達、帰れないの？そんな…」

「うん、それ使えば帰れないこともないけど」

と言って、僕は玄関の隅で水色のポリバケツに入った傘の束を指差した。他の生徒が忘れていった傘だろう。

「それって人のでしょ。盗むの？」

「盗むっていうか、ちよつと借りるだけだよ」

「でもこれじゃ……」

中川は玄関前から一步踏み出し、空を見上げた。途端に強風が彼女の身体を校舎に押し戻す。これでは傘をさして表に出ても、折れ曲がってしまうのがオチだろう。

再び沈黙が流れた。僕は「もうちよつと中で雨宿りしていいころよ」と言いたいのだが、女子を誘ったりするのが苦手な性格が災いしてか、口からその言葉が飛び出ようとしなかった。自分の中で葛藤が始まった。黙ったままの中川の顔を見つめつつ、僕は自分と戦っていた。

「ねえ……」

意を決して言いかけた時、

「ちよつと雨が止むまで避難しましよ」

彼女の言葉が僕の口を封じた。何か言おうとした瞬間に相手も口を開き、自分の発言が潰される。こういうのは最もバツが悪い。それとも思い切って言おうとした事だったからなおさらだ。僕は恥ずかしさに顔が熱くなった。

ただ、結果的には望み通りになったのだった。僕は中川という時間が続くことに満足と緊張と興奮を覚えていた。その証拠に僕の身体の一部は奮い立ったが、何とかそれを彼女に気取られぬよう努めた。

「寒い……とにかくここから離れましよ」

玄関の扉は開けっ放しで、冷たい風が隙間から吹き込んできた。彼女の言に従い、僕達は玄関を離れ、何処へ向かうともなく廊下を歩いた。

「とりあえずここに入ろっか」

この世に二人きり

1年3組の前まで来て中川がそう言うので、僕は頷いた。

その9

入った教室は当然の事ながら、無人の世界だった。僕達はどちらからという訳でもなく、イスに腰掛けた。

「寒い…」

中川は震えていた。実際に気温も低いし、現在置かれている状況への精神的不安も関係あるに違いない。

「こんなので良ければ着る？」

と言つて僕は自分の学ランを彼女に渡した。多少、匂いがしないか気になったが、そんな事も言つてられなかった。

「ありがとう」

少し微笑んで、彼女が礼を言う。僕はその顔を見ただけで何だか幸せな気分になった。

それから中川は再び黙ってしまった。こういう時、どうしていいかわからないのが、僕の情けないところだ。沈黙に空間を支配されてしまうと、どうにも出来なくなってしまう。

そういえば

「バーカ、無理にぺちやくちや喋る必要はないんだよ」

と服部が言つていたのを思い出した。

「喋つてばかりの男は逆に嫌われる」

とも言つていた。僕は「沈黙イコール暗い」というイメージがある為、黙っているのが苦手なのだが、服部あたりになるとそうではないらしい。

「いいか、ハンサムな男が黙つててみる。物静かな落ち着いた好青年つて感じで、かつちょいいいだろ？逆にそいつがギャーギャーわめいていたらどうだ？魅力半減だぜ」

「ふん」

とその時は何気なく聞き流していたが、現実の状況に直面して、そういうことも考えられなくはないと思った。ただ、僕は「ハンサ

ムな男」ではないのが気掛かりであるが。

服部の話を思い出したので、多少沈黙にも耐えられる気がした。

中川の顔を見ることで悦に浸り、沈黙による恐怖も振り払えた。程なく彼女の方から口を開いてきた。

「ねえ、黙ってないで、何か話して。不安になっちゃうよ」

「えっ」

沈黙には耐えた僕だったが、突然の「喋ってくれ」発言には意表を突かれた。逆にもっと苦手な事を押し付けられてしまった。こんな状況で気の利いた会話が出来ないのが僕の弱みだというのに。だけど、何か話さない訳にはいかないだろう。

「んっつ、えっつと…」

中川は僕の顔をじっと見ていた。小綺麗な顔立ちで本当に僕のタイプなのだが、今に限ってはその注目が辛い。僕は困った。挙げ句に飛び出した言葉が、

「中川さんって何が好き？食べ物」

という稚拙な質問だった。

「あははは。おっかし〜。三上君って本当に面白いね。それってギヤグ？」

「ま、まあね…」

僕としては真剣に言ったつもりだったのに、ふざけと受け取られてしまったようで、彼女は笑い続けていた。確かに場の空気に合った質問ではなかった。ただ、結果的には落ち込み気味の相手を笑わせる、予想外の結果を生んだのでラッキーだった。

「私かね、好きなのは、オムライスかな。あはは」

中川は答えながらまだ笑っていた。

「俺は…寿司かな」

何とか会話を繋ごうと、僕は自分の好みまで答えた。

「寿司もいいわね。私、貝類が大好き」

その言葉を聞いて、僕は卑しい想像をしてしまった。見た事はないけれど、女性の大事な部分は貝のようだという。貝好きだと言う

中川がまさか一人でしている訳はないと思いながらも、僕の頭は言葉と結びつけて想像に及んでしまう。

「ねえ、どうしたの？急にニヤニヤして？」

「あ、いや。何でも…」

一瞬の夢想到に浸っているところを現実に戻されて、ハツとした。

僕の目が垂れていたのか、はたまた口元でも歪んでいたのか、彼女は変に思ったようだ。

「変なの。まあいいわ。それで三上君の好きなネタは何なの？」

「俺はね…、エンガワ・ウニ・イクラなんかかな。あ、貝類も好きだよ」

「もう、取って付けたように言っつて！」

「いや、本当だよ。赤貝とか美味しいじゃん」

僕は答えながら、思った以上に会話が続けている事に気が付いた。調子に乗って僕は聞いた。

「じゃあ話は変わって、中川さんの趣味は？」

「えっ、まだその方式が続くの？質問責めね」

「どんどんいきますよ。で、趣味は？」

僕はこんな軽口が叩けることに、自分でも驚いていた。服部じゃないが、慣れてしまえば女子との会話も大した脅威ではないのかもしれない。

「趣味ねえ…、ウインドウショッピングかな」

「へえ、いいね…」

言っただまま、僕は固まってしまった。実は僕は買い物への興味はほとんどなかった。というか苦手だった。買い物嫌いな訳ではないが、ダラダラと見ているのは好きじゃない。彼女と趣味が合わないそんな自分が嫌だった。

「三上君は買い物好きじゃないの？」

中川はそんな僕の心を見透かしたかのように尋ねてきた。表情でも読まれたのか、実に勘の鋭い女の子だ。

「ま、まあね。好きと言えば好きだし…」

「何だかハッキリしないのね。まあいいわ。それで三上君の趣味は？」

「俺はね…、うーん」

僕は悩んだ。素直に答えると、テレビゲームとかになってしまう。近年、大衆的になってきたとはいえ、未だテレビゲームは女の子ウケが良くない。オタクの象徴的存在というレッテルを貼られ兼ねないのは、実に嘆かわしい。しかしそう思っている僕自身が、オタクとみなされることを恐れている有様では、彼女にそう思われるのもあり得ない話ではない。結局、僕の口から出たのは

「読書…かな」

という嘘だった。

「ふうん。三上君って本読むんだ？ちよつと意外…」

「そう？」

「なんかあまりそうは見えないけど…。って、ごめんなさい、私失礼なことを…」

「いや、いいよ」

僕はそりゃその通りだと言ってやりたかった。謝られるなんて逆に心苦しい。

「ホントにごめん。じゃあ読書好きの三上君、好きな作家はいるの？」

「え〜とね…」

嘘はすぐバレるのが、身に染みて分かった。嘘で固めると、話が続かないものだ。かといって、今さら「嘘でした」とも言えないので、僕は適当に

「村上龍とか春樹とか」

なんて答えた。すると、

「村上春樹、私も好き！『ノルウェイの森』最高よね」

と反響があり、また困るハメになる。

「ああ、うん」

僕は何気なしにそう答えたものだから、次の質問

「登場人物の中では誰が好き？」

には本当に参ってしまった。

「そうねえ…」

なんて言いながら、どうしようかと必死に考える。当然一人も知らないのだから答える術はない。こんな時思い浮かぶのは「渡辺」なんて名前しかなく、まず間違いなく登場人物の筈はない。中川をちらと見ると、まだ好奇心旺盛な感じで僕を見つめている。これは困った。彼女が好きなのは何という名の奴なんだろう…。（あ、そうか）

「中川さんは誰がいいの？」

こういう手があった。

「私はね、ワタナベよ。本当にいたら素敵じゃない」

「凄いや。俺も「渡辺」なんだよ。あはは…」

うまくいくと同時に僕は苦笑した。適当に考えついた名前で充分だったなんて、思いも寄らなかった。

とにもかくにも危機を乗り切り、会話は並行状態になった。僕は例の如く質問責めで何とか話を続けた。とりあえず彼女も笑顔を見せながら答えてくれていた。

その内に不意に彼女から出た質問が、

「ねえ、三上君って好きな子とかいるの？」

というものだった。

その10

「えっ？」

僕は一気に身体が熱くなり、鼓動が早くなるのを感じた。

「だから、好きな子はいるの？」

そんな僕とは対称的に、中川は平然として質問を繰り返す。

「俺さ……」

僕は迷っていた。告白するにはまたとないチャンスである。しかし、こんな話をしながら顔色一つ変えない彼女を見る限り、うまくいく可能性は低いように思われるし、そうなった場合、この二人きりの空間はとても気まずいものになってしまうだろう。

でも……ぼくはまた服部の言葉を思い出し出していた。

「『下手な鉄砲数撃ちや当たる』って言葉あるだろ？あれって正しいんだぜ。とにかく告らなきゃ始まんねえよ。俺なんてどんだけ弾かれた事か。命中率なんて3割にも満たねえよ。ただひたすら気に入った女には声を掛けた。それで何人かモノにする事が出来たんよ」
さらにこうも言っていた。

「女つてな、自分を好きだと思ってくれる男に惚れる事もある。たまにお高くとまっている奴もいるが、基本的には誰だって自分に好意を持ってくれる相手を悪く感じるなんて事はないぜ。それに、その時はダメでも、告白をきっかけに気持ちが動いていく事だってあるんだ」

実際、服部はそれで校内でも人気の高い、隣のクラスの美川を落としたと言う。服部自身は容姿も悪くはないが、美川と釣り合うかという疑問符が付くくらいいい女だった。

それを考えると、僕と中川だってまんざらでもないかもしれない。現に今こうして話していて、彼女が僕を嫌がっている素振りなどは見られない。服部の言うように、告白によって相手の気持ちが動くこともあり得るかもしれない。

「ね…。ど…なの？」

再度の問い掛けが外の豪雨に混じって耳に入った。僕は腹をくくった。今ならいける、僕はそう思って口を開いた。

「俺はさ、その…」

いざ言い掛けて口が固まった。告白してやろうと思っていたが、簡単に言えたもんじゃない。心臓が最高速で鳴り響き、顔が熱くなり、喉が渇くというか締め付けられるような感じになり、言葉を続けさせてくれなかった。

「どうしたの？」

変わらず平然としている中川を見ると、言ってもうまくいかない気がしてきて、なおさらためられる。

こんな調子で、僕はいつも告白出来ないのであった。今度こそ言おう言おうと思いつながら、口に出せなかった事が過去に何度もある。そしてその後「やっぱり気持ちだけでも伝えておけば良かった」と大きく後悔するのであった。

だったら今度こそ後悔するべきじゃない、と思うのだが、いざとなると尻込みしてしまう。そんな勇気が湧いてこない。むしろ拒否された時の恐怖感が常につきまとう。

「いざ告白出来ないってのは、所詮その程度の気持ちなんだよ」

と言う人もいる。そうなんだろう？僕は心の中で自問自答を繰り返した。

が、当然考えがまとまる筈はない。高速の中で瞬時に判断を求められるF1のドライバーでもあるまいし、こんな緊張した空間の中で一瞬にして答えを出せと言う方が無理だ。ならばどうするか。二つに一つだ。この場で告白するかしないか、瞬時に決めるしかない。雨音がさらに激しくなり、僕の回答を急かしているようだった。

気のせいかな、中川も待ちくたびれて退屈そうに見えた。僕は段々焦ってきた。考えている暇などない。僕は半分ヤケ気味に、鬱屈したものを吐き出すように叫んだ。

「俺は、俺は！なか…」

だが、叫びは突然の轟音に掻き消された。窓の外、教室から見える所に巨木があるのだが、それに雷が直撃したのだった。木は真つ二つに裂け、教室側に倒れてきた。

「きゃあつ」

中川が叫び声を揚げる。倒れた木は窓ガラスを突き破り、枝が教室まで入り込んできた。ガラスの割れる、ある種爽快な音が響く。割れた窓枠から風雨が吹き荒れてきて、室内は一気に冷え込んだ。

「うわっ」

突風が僕の顔に吹いてきた。頬に触れると、飛んできた雨で濡れていた。

「出よう」

僕は震えている彼女を促し、教室を出た。

外が曇っている為か、廊下まで真つ暗で夜みたいだった。中川はさつきまでの元気を完全に失い、しょげていた。やはり僕にはこんな時、どうやって元気付けなければいいのかが分からない。いや、それ以前に自分自身もかなり混乱していた。

僕は元々そんなに強い人間じゃない。こんな状況に直面した事もないし、対処法も知らない。まず校舎内にいるべきなのか、外へ出るべきなのかの判断も付かない。もはや二人きりでいる事がラッキ―などという気持ちよりは、早く安心の出来る所へ行きたい気持ちの方が強くなっていた。単純に雨を凌ぐだけならば校舎なのだろうが、このまま誰もいない所にいるのは賢明なのだろうか？強風と大雨の中、びしょ濡れになつてでも表に出るべきではないか？先日、緊急避難マニュアルみたいな本が教室で配られたが、少しでも見ておけば良かったと、今さらながらに思うのだった。

僕達はとりあえず体育館まで走って行き、へたり込むように座った。屋根を打つ雨音や雷音以外、だだっ広い空間が静かなのは不気味だが、教室に入るとさつきの事を思い出してしまいそうだし、今はここにいないしかない気がした。中川は落雷と巨木の転倒に相当な恐怖を感じたようで、体育座りをしながら暗い表情で俯いていた。

僕は会話もし辛いし、目のやり場にも困って、周囲を見渡した。

バスケットリングが四つあって、真下辺りにボールが数個落ちている。ステージ上には当然誰もいなくて、全校集会の時の人の群れ具合がまるで嘘のようだ。続いて大きな丸い掛時計を見た。3時15分…。そんな筈はない。壊れているのだろう。大した事ではないだろうに、いざ時間がわからないとなると、何だか無性に気になった。でも二人とも腕時計はしていないし…。

「あっ！」

僕は思わず叫んだ。

「バカだ、俺達。よく考えたら携帯があるじゃん」

これは盲点だった。普段、着信なりメールなりが来ていないかと授業中でもチェックをするのに、こんな時になるとその存在を忘れてしまうなんて。

「ホントだ！そうよ、どうしてこんな事に早く気付かなかったのかしら」

僕も中川も嬉々として懐なりカバンなりを探った。僕達はほとんど同時に携帯電話を取り出し、そしてほとんど同時に

「ああ…」

とため息を吐いた。喜びはほんの一瞬でしかなかった。二人とも携帯電話の電波が圏外だったのだ。

「でも何処かで電波が立たないかしら？」

「ちよつと動いてみようか」

僕達は立ち上がった、体育館から再び玄関の方へ向かった。

玄関の近くまで来ると、風が唸りを揚げていた。下駄箱の辺りまで行くと、突風で身体が押し戻される。よく見ると、ここでもガラスが割れて、あちこちに散らばっていた。ゴミや折れた傘なんかも飛んで来ている。こんな所ではとても電話なんて出来そうにない。仮に電波が立っていたとしても、会話は雨風の音に掻き消されてしまっただろう。

「ダメだ。風が強くて外には出られないよ……」

僕は中川にそう言っていると、とりあえず玄関を離れた。彼女もずっと携帯を見ていたようだが、電波が立つ気配はないようで、首を横に振った。

「どうしよう?」

廊下にたたずみながら彼女が聞いてくる。

「うーん、普段の教室ではバリバリ立つんだけどなあ……」

「さっきから全然立ちそうにないわ。どうしちゃったのかしら……」

「とりあえず歩きながら、電波立つ所を探そうか?」

「うん……」

僕達は仕方なく、一階から順番に校舎巡りをする事にした。二人して携帯電話の画面を見つめながら、ゆっくりと歩く。教室に一つ一つ入って、隅から隅まで行って電波の具合を確かめる。しかし、何処へ行っても「圏外」の赤字は変わらなかつた。

半ば諦め掛けた頃、用務員室に入った僕らはまた一つ忘れていた事に気が付いた。何かと言っていると、一般の電話機が存在だ。

「こんなことに気付かないなんて……」

呆れたように言う中川だが、顔はほころんでいた。

「掛けてみよう」

僕は早速受話器を取り、ダイヤルに指を伸ばした。が、何の音もしない。

「どうしたの？」

「音がしないんだ……」

僕は受話器を渡した。それに耳を当てた彼女はすぐに落胆の表情に変わった。しかし、すぐにダイヤルを回して状態を確認していた。「どうしてよ……」

その行為も虚しかったようで、彼女は嘆息した。

「やっぱり繋がらない？」

「うん……。何で……。何でなのよ？どうして私達がこんな目に遭わなければいけないの？」

「それは……」

そんな事、僕に聞かれても答えなど分かる筈もなかった。僕だつて知りたいくらいだ。

「それよりさ、上まで回ってみようよ。電話なら教務室にもあるだろうし」

「そ、そうね……」

僕の提案で、上まで電話と電波を搜索に行く事にした。

一階は全滅だった。二階に上がり、教務室で電話を確かめたが、全ての電話機が通じなかった。電話線が切れているとしか考えられない事態だ。諦めきれない中川の頼みで、部屋をくまなく電波探しすることにした。中川は隣の校長室から、僕は教務室の一番端っから電波を探った。

携帯を見ながらうろついていると、柳沢の机があった。いつもこんな部屋には顔を出さないの、奴の机の位置を今日初めて知った。書類の束やタバコの吸殻の入った灰皿、菓子のお包み紙等が散乱して、部屋で最も机上が散らかっており、奴にお似合いの汚さだ。日頃の憎らしさがあって、僕は誰もいないのをいいことに奴の机を蹴り飛ばした。すると、衝撃で何かが落下した。

「何だこれ……」

それはヤケにいろいろと書き込んだノートだった。僕は何となく気になってめくってみた。

最初のページに書いてあったのは「1番 阿部雄介」と題されたデータだった。阿部雄介はウチのクラスの名簿1番である。彼について、ノートの1ページ分解説が書かれていた。クラスや校内での役割・成績・身体検査項目以外は、柳沢の個人的感情が主となる内容で、

「デブ。短足。図体に似合わず弱っちい。本を読むのが好きなようだが、国語がダメというアホ。仲がいいのは西村・八木沢あたり。まあまあ素直。母ちゃんが成績にうるさく要注意！評価65点」

なんて書かれていた。次のページを見ると「2番 伊藤 孝」で、どうやらクラス全員について同じように書いてあるらしかった。こうなると自分の所が気になってきて、僕は一気にページをめくった。

「34番三上」には汚い字がびっしりと書き込まれていた。それも変な似顔絵付きだ。僕の顔がデIFOオルメされて、鼻毛や落書きと共に描かれていた。本人から見て「似てる」とは言いたくないが、確かに特徴は掴んでいて腹立たしい。

知ってはいたけど、成績のグラフはひどいもんだった。改めて表にして突きつけられると、如何に自分が出来なかがよく分かる。これまた腹が立つので、そんなものは無視して柳沢のコメントに目を移した。

「バカ。全然ダメ。遅刻常習犯。言うことは聞かないし、口答えをして、常に反抗的で救いようがない。見ているだけでイラつく。親は無関心。服部のアホと仲がいい。0点どころかマイナス点野郎」

これまた予想はしていたが、ひどい書き様だ。確かに指摘通りではあるけれど、頭にきた。仮にも教師たる者がこんな主観的な意見を持っていて良いものだろうか。教師も人間なんだから、好き嫌いはあるだろう。でもそれにしたってちよつと度が過ぎる。僕から言わせれば、奴の態度が感じ悪いから反抗的になるのだ。それを棚に上げて、僕の事を悪し様に言うなんておかしい。犬猿の仲と云うのか、そりが合わないのは仕方がない訳で、それを理由に僕の評価を下げるなんて専制君主みたいな行為だ。いや、奴は「先生君主」と

でも言うべきか。

コメントを読んだ僕は凄く嫌な気分になり、全身が熱くなると共に震えを感じた。胸の中も、何とも言えないもやもやで満たされた感じだ。こんな時、何かに八つ当たりしたくなるのは必然的で、僕は先程以上のパワーで柳沢の机を蹴り飛ばした。

途端に大きな音が響き、机上の散乱物が落下して散らばった。同時に埃も舞って、僕はむせた。

「どうしたの？」

相当大きな音だったようで、中川が心配そうな顔をしてこちらへ顔を見せた。

「いや、何でもないよ。ちょっと机の物を落としちゃって……」

僕はとりあえずそう答えておいた。

「もう。ビックリさせないで。心臓が止まるかと思ったわ」

「ごめんごめん。気を付けるよ」

僕の言葉を聞くと、中川は再び校長室の方へ戻っていった。残された僕は散らかした物もそのまま、電波を探すのも二の次に、また柳沢ノートを開いた。奴が女子についてどんな事を書いているのが気になったのだ。ひよつとしたら中川について未知の情報を仕入れられるかもしれない。そんな淡い期待と共に、僕は中川のページをめくった。

「何だこりゃ」

思わず独り言が出た。中川のページには彼女の写真が3枚貼ってあったのだ。それもいつ撮ったのかは知らないが、彼女の魅力を引き出した写りの良いものばかりだった。特にその内の一枚はスクリーン水着姿で、どう考えても盗撮したとしか思えなかった。胸の膨らみが普段より強調されており、若い僕の下半身はすぐに反応した。当分引っ込みそうにないので、そのまま内容に目を移した。

予想通り成績は良好で、クラスでも3番には入っていた。健康診断を上手く利用したのか、B・W・Hまで銘記されており、無法な柳沢への怒りは増大した。B90はやはりデカい部類に入るだろう。

早くもその中身を想像してしまっあたり、自分のスケベ根性に恐れ入ると同時に恥じ入った。盗撮や個人データ搾取などはしないものの、あまり柳沢と変わらないような気がして嫌だった。

実際、僕と柳沢は同じ穴のムジナだった。奴の中川へのコメントを見て、僕は衝撃を受けた。

「可愛い。モロにタイプ。見た目に反して乳デカい。かしこい女だ。何とか卒業までに一回やりたい。両親も感じのいい美男美女。100点満点」

奴も中川を狙っていた。どちらも成功の可能性があるかはともかく、恋のライバルだったのだ。お互いソリが合わないのも無理はないのかもしれない。

「ねえ、何見てるの？」

不意に後方から声が聞こえて、僕は慌ててノートを閉じた。中川がこちらに戻ってきたのだった。

「いや、何でも。さっき落としちゃった物を机に上げ直してただけだよ」

僕はそこら中に散らかった物を集めて、机上に置いた。

「ちよつと派手に落としちゃったもんで…」

「ホントだ。ひどい散らかり方…。手伝うわ」

僕に近づいてきた彼女も現状を認識したようで、落下物を拾い集めてくれた。

「柳沢先生の机って本当に汚いわね」

「ありがとう」

僕は礼を言った。どちらかと言えば落ちた物を拾ってくれる事よりも、柳沢の机の汚さをけなした事にだ。奴が貶められるのはやはり痛快だ。

「三上君、いつも先生にあれだけ言われると嫌になるでしょ？ねちっこいよね」

「まあね。中川さんも嫌いなのか？」

「嫌いっていうか、何か気持ち悪いのよね。『中川は休みなんか何

してるんだ？」なんて聞かれた時はゾツとしたわ」

「へえ〜。セクハラ野郎だな、あいつ」

僕はさっきのノートのコメントを思い出していた。さりげなく彼女に近づこうと行動している柳沢に呆れるとともに、怒りが沸いてきた。いつそのこと、あのノートを見せてやるうかと思っただが、僕が盗み見をするような人間だと判断されるのも嫌なので思いとどまり、普通に机の上に置いた。

「女子はみんな嫌ってるわ。変な事を聞いてきたり、すぐ身体に触れてくるし…」

「あいつ！ひどい奴だな」

柳沢が女子に嫌われていると聞き、僕は「ざまーみる」と思った。散々、偉そうに能書きをたれてる割には、全然威厳がないではないか。奴は皆に尊敬されている（もしくは好かれている）と思っっているのだから、とんだ勘違い野郎だ。やはり僕は間違っていなかったのだと知り、何だか嬉しくなった。

「三上君も大変よね、歌わされたりして」

「うん。あれは本当に参ったよ。まあ遅刻する俺も悪いんだけどさ」「そんなことないわ。柳沢先生は特定の人ばかりを狙って嫌味を言うもの。ああいうのって嫌らしいわよ」

言われてみれば確かにそうだ。奴は僕や服部などを集中的に攻めてくる。気に食わない人間だけを標的にしているという彼女の指摘は間違っていないように思える。

「今、教師の資質等が問われている時代なのにね。いまだにあんな先生がいるなんて信じられないわ」

「本当にね。俺も今まで18年間生きてきて、あんな教師に会ったことないよ」

「先生も人間だからいろんなタイプがいるんだろうけど、あれはちよつとねえ…」

中川が呆れ顔なのが嬉しい。少なくとも柳沢には勝ったという気分になれる。

「いやあ凄く嬉しいな、わかってくれる人がいるなんて」

「当然よ。あんな先生に味方なんて誰もしないわ」

中川の口振りは相当に厳しい。口には出さないが、柳沢絡みで何かあったのかもしれない。「まあ、あんな人の事はどうでもいいから、早く電波探しを再開しましょ」

「う、うん」

人の怒りのパワーとは凄いもので、柳沢の文句を言い始めた途端、僕も中川も元気が出た気がした。特に中川は先程までの萎れた様子は何処へやら、一気に復活していた。

それから僕達は電波を探して歩き回ったが、結局四階までの全ての場所でアンテナは立たなかった。屋上の方も強風に打たれた扉が派手な音を立てていて、とても表には出られそうになかった。仮に屋上に出て電波が立っていたとしても、電話などしている余裕はないだろう。雨風で音は聞こえないだろうし、まずそんな中で立っている事も出来ないと思う。

そんな訳で僕達は携帯電話の使用を諦めた。こうなるともう雨風が止むまで校内で待つ他はない。仕方がないのでスタート地点である体育館まで戻り、再びその場に座り込んだ。幾分、元氣を取り戻したかに見えた中川も携帯使用絶望を悟ると、またふさぎ込んでいた。

僕達の間にも再び沈黙が流れた。ただでさえ気の利いた言葉なんて言えないのに、こんな状況になってしまっただけは元氣付けるのも困難を極めそうだ。というより僕自身も少なからずショックを受けていて、覇氣がなくなっていた。何とも重苦しい雰囲気僕達は静かに座っていた。どうしてみようもない感じで、しばらく嫌な気分が続いた。

その12(前書き)

妙に汚い内容の回です。心してお読み下さい。

この世に二人きり

その12

そのせいか、僕は急に腹痛に見舞われた。腹痛と言っても原因不明のものではなく、毎日起こる用便現象のそれだ。僕は気が重くなると腹も重くなる事が多い。そして気分も腹も苦しくなっていくのだった。いきなり強烈な波が襲って来たので、いてもたってもいられなくなってきた。

「ちよつとトイレに行ってくるね」

大だとバレたくない僕は、努めて冷静な振りをして、ゆっくりと立ち上がった。

「えっ、そんな…。一人にしないでよ」

「うん」

そんな事を言われるとは思ってもみなかった。普段ならとても嬉しいのだが、今は緊急を要する。

「すぐ行って来るからさ」

「うん…」

渋谷のようだが彼女が承諾したのを見届けると、僕は一目散にトイレ目掛けてダッシュした。

体育館の脇にトイレがあり、僕はそこに駆け込んだ。尻を押さえながら一番手前の大使用の個室を開けると、そこは飛び散った用便で汚れていた。とてもその気にはなれないので、隣へ移る。だが、ここも同じ結果。残る枠はもう一つのみで、僕は祈るような気持ちで扉を開けた。

「おーい…」

思わず口をついて叫びが出た。このトイレの大便器は全滅だった。日ごろの清掃回数が少ないためか、便器が汚いまま放置されているのだった。一刻を争う状態ではあるが、ここでするのはためらわれた。

だが、ここ以外のトイレに入る訳にもいかない。というのは、こ

この入口は座っている中川から丸見えなのだ。ここから他のトイレに行くということは、大便器を探しに行くことであり（小便しにトイレを変えるなど、超満員でもなければあり得ない）、僕は彼女に大便をする事を知られたくないのだ。

皆、経験があるのではないかと思うが、小学生の頃はトイレで大便をするだけだからかわれたものだ。当時、大便は誰もが毎日（ではない人もいるだろうが）することなのに、人前では出来ない行為であった。理由は「臭い・音がする」ため、他人にそれを知られるのが恥ずかしいからではないかと思うのだが、よくよく考えると「他人」も同じ行為をしているであろうにおかしな話である。そんな訳で僕も基本的に朝、必ず家で行い、学校ではしないよう心掛けてきた。しかし最近となると不摂生が影響してか朝出なかったり、遅刻ギリギリに家を出ているのでトイレに入る暇がなかったり、学校でする事も多くなってきた。その場合、人に気付かれぬようこっそりとトイレに行き（それもあまり人が来ないトイレで）、用を足すのだ。正直、人に「大便をしている」と気付かれるのはやはり何となく嫌で、隠したい事だった。「大便をしている」もしくは「大便をしてきた」事を知られずにいるのが何より平和だった。背後に立たれるのが嫌であるのと似ているのだが、誰かにバレているなんて事を考えると、肛門が縮むのか、出るものも出なくなってしまうのだ。

もちろん今朝も、家でしてくる暇などなかったのではない。まさかこんな事態になるとも思っていなかったので、学校でするつもりでいたのだ。ただ、やっぱり中川に「大便をして来た」とは知られたくない。

「腹の調子が悪くてさ」

と笑って誤魔化すのも手だが（実際、僕は大便がバレた時にはこう言う事が多い）、僕「大便（もしくは下痢）のイメージを彼女に植え付けたくはなかった。」

とはいえ、今は我慢の限界状態である。こうなると背に腹は変え

られない。三つの中でもなるべく綺麗な便器を選んで速攻で事を終えるしかない。あくまで小便と見せかけるにはそれしかなかった。

僕は鼻を摘むような匂いに耐えながら、もう一度便器を見て回った。どれも同じようなレベルの汚さで変わらないが、真ん中の便器が時間の経過で、こびりついた糞尿が固まりかけているように見える。仕方がないからここに決めた。

糞尿を踏まないように踏ん張りポジションを取り、僕は気張った。しかし、

「くそっ」

出るべきものが出てこない。さっきまで破裂しかねないばかりの勢いで腹と肛門を圧迫していた便が、いざ排出しようとするとならないのだった。僕は今、早く事を終えたいと思っていた。だが、そう思えば思うほど便は詰まり、僕を困らせた。

そういえばこんな経験はよくしているのだった。僕は妙にデリケートな面があり、特にトイレは落ち着いた環境でないと出来ない性質だった。今も「中川にバレたくない」という緊張感と、「急がなくては」という切迫感が襲ってきていて、とても落ち着いて大便を出来る状況ではないのであった。こんな時はすっきり出た事がない。さりとてこのまま排便しないでいては、いつまた腹痛がやってくるかわからない。僕は踏ん張らざるを得なかった。

「ううっっん」

頭に血が上りそうな程、力んだ。

「はあっ、はあっ……」

息を止めて力を込めたため、息切れした。慌てて酸素を吸い込もうとしたら、強烈なメタンガス臭にむせて思わず吐きそうになる。そんな苦勞の割には、尻から出たのはウサギの糞程度の丸い固まりのみ。無理矢理出したので、肛門もひりひりする。

「ちくしょう」

悔しくてもう一度踏ん張るが結果は同じだった。腹はずっと重い感じが残っているのに出てくれないので、諦めるしかないようだ。

こんな状態のまま戻るのは不安だが、そうも言っていてられない。僕は急いで尻を拭くと、飛び散った糞尿を踏まないように立ち上がり、個室を出た。

手を洗ってる最中に、また腹が圧迫されるような感覚を覚えた。

本当に思い通りになってくれない嫌な腹だ。今さらもう一回する訳にもいかないのに……。僕は耐える決心をして、トイレを出ようとした。が、

「待てよ」

一つ気になる事があった。僕は糞尿の散らばる汚い個室にいたし、自らも排便したばかりなので、臭くないだろうか。僕はしゃがみこんで、自分の身体のおちこちの匂いを嗅いだ。念のため、靴の裏も見たが、こびり付いてはいないようだ。何か匂うような気もするが、トイレ内なので自分なのかどうかはつきりとはわからない。気になつて仕方がないが、のんびりとはしていられないので、僕は体育館へ足を向けた。

「遅いわよ」

着くやいなや、中川は口を尖らせて言う。

「こんな所で一人になるのって心細いんだから……」

「ごめん。ちよつとトイレが汚くて……」

僕は自分でも理由の立つてない言い訳をした。言つてすぐに、こんな答弁では大便をしてきたと思われてしまうだろうか、と不安になつた。

「ふうん。まあいいわ。ちゃんと戻つてきてくれたし。ひよつとして戻つて来ないのかと思つたから……」

「そんな事する訳ないじゃん」

僕は中川が大便など考えていなかった事実に安心すると共に、戻らない事をこんなにも心配していたのだと知り、嬉しくなつた。

「そうよね。こんな変なことになつちやつたから、過剰に心配性になつてダメね」

「そんな事ないよ。誰だつて不安になるさ」

僕だつて全然別次元だが、大便発覚という無意味な不安を感じていた訳だし。

「ねえ、天気良くなるまでここにいるしかないんだし、楽しくお話でもしましょ」

「うん。いいね。そうしよう」

僕達はしばらくの間、他愛もない事を喋って時を過ごした。クラスの話、部活の話、最近のTV番組や芸能人の話など、会話は弾んだ。中川は努めて明るく振舞おうとしているようで、笑顔を見せる場面が多かった。そんな彼女の方が話題を振ってリードしてくれるので、僕も楽だった。ただし、時折便通をうながす痛みが襲ってきた、それに耐える辛さはあった。先程は彼女も気にしてなかったよ。うだが、やはり「大便に行く」とは言い出し辛くて、僕は我慢した。そんな中、体育館に叩きつける雨音に混じって、ゴニョゴニョという感じの音が微かに聞こえた。僕は中川を見た。彼女はうつむいて真っ赤になっていた。

その13 (前書き)

段々とひどい内容になっていきます…

この世に二人きり

その13

「恥ずかしい…。お腹が鳴っちゃった」

「何だ、中川さんのお腹の音か！何かと思ったよ。そういえば腹減ったね」

「うん…」

頬を赤く染めて恥ずかしそうにする彼女はとても魅力的に見えた。と同時に腹が鳴るなんて、かわいい女の子でも同じ人間なんだと改めて思った。

美しい女性・カッコいい男性なんかは、とにかくいいイメージだけが先行するものだ。しかしアイドルであろうが俳優であろうが、屁はこくし、大便もする。もちろんSEXだってするのだ。人は誰かに魅了されるとその対象を「偉大な者」と認識しがちだが、人間である以上、自分と同様の生理現象を持つ事は忘れてしまう。何かのマンガにも「さんは屁もこかないんだぞ！」とオタク系キャラクターが憧れの対象を賛美するシーンがあったが、こういう思い込みはむしろ自分を貶め、卑屈にさせてしまう。相手も同じ人間だと思えば、憧れの相手（僕にとっては好きな女性）に対しても臆せず向かっていけるのではないかと、ふと思ったのだった。

「何か食べるものは…」

僕は言いながら、ポケットをまさぐり、カバンの中を見た。

「あちゃ〜、これだけか…」

結局、出てきたのはガムとど飴だけだった。

「私、お弁当があるの。一緒に食べましょう」

中川はカバンから包みを取り出した。

「うわっ、凄い。ホントにいいの？」

「うん」

「やった〜、ありがとう」

中川が包みを開き、弁当箱が姿を現した。蓋を開けると、中は玉

子焼き・ウインナー・ブロッコリー・レタス等のおかずが半分、ふりかけをまぶしたご飯が半分とそれぞれ領地を占めていた。

「凄いや。おいしそうだね」

「私が作ったのよ」

「えっホント？ひよっとして毎朝作ってるの？」

「ええ。自分で作ると何でもおいしく感じるのよ。そのせいで遅刻ギリギリになっちゃうことが多いけど…」

「そうか、それで今日も遅かったんだ？でも手作りなんて大したもんだね。凄いな」

「そう？褒めてもらえると嬉しいわ。肝心の味の方はどうかしら？」

「どれどれ、それじゃいただきます」

僕は爪楊枝に刺さったウインナーをもらった。

「うまいっ」

「ホント？嬉しいなあ」

それから僕はおかずを一通りもらい、ご飯も分けてもらったが、全て自分の口に合うものだった。こういうおいしい弁当を作れることは、男の母性本能をくすぐるようで、また一つ彼女の魅力が上がった。これがマズかったりしたら、逆に魅力は少し落ちたことだろう。

「ごちそうさまでした」

弁当箱は空になり、僕は軽く手を合せて彼女にお辞儀した。

「いえいえ、食べてもらえて良かったわ」

「ホントにおいしかったよ。中川さんって何でも出来るんだね。凄いなあ」

「そんなことないわよ」

「だって成績はいいし、バスケはうまいし、料理も出来るってくれば、鬼に金棒でしょ」

「そんなの大した事ないわ。それに私だってコンプレックスくらいあるわよ」

「そんなのあるの？」

「まず背がもう少し高くなりたかつたし、彼氏もないし…」
「えっ、中川さんって彼氏いないの？」

噂では聞いていたが、本人の口から聞くと真実味があり、僕は内心喜んだ。

「いないわよ。恋愛に関しては全然ダメ…」

「ホント？中川さんモテそうだけどなあ」

「そう？それなら三上君、誰か紹介してくれないかなあ」

「ははは…」

こんな時、服部なら「俺なんてどう？」などと言っただろう。そうすれば気軽に告白出来るし、否定されても「冗談だよ」と笑って誤魔化せるのだと思う。だけど僕にはそれが出来なかった。そのよ
うな言葉は軽く口をついて出ない。

「だ、誰か、いい人でもいるの？」

と言っのが精一杯だった。

「いい人ねえ…、一応いないこともないけれど…」

「いるんだ？やっぱり…」

彼女に好きな相手がいると知った瞬間、僕の心の中は瓦礫が崩れ去るような喪失感で一杯になってしまった。毎度の事だが、早くも弱腰になってしまう。

「いるって言うか…。まあいいじゃない。それより三上君こそ、さつき教室で聞いた答えはどうなったのかしら？」

「えっ」

僕は突然の逆襲に驚いた。彼女に好きな奴がいると聞いて、動揺していたというのに、さらに混乱した。さつきは確かに勢いに任せ告白しようとした。しかし、今言うべきなんだろうか？彼女が「いい人がある」と言っているところへ、無謀な告白をしても意味がない。焼け石に水ではないか。

だが、よく考えてみれば「いい人」が僕である可能性も0%ではない。先程の弁当の事や度々頬を赤くしている彼女を見ると、良い方に考えたくもなる。確証はないのだが…。

結局、僕はこう言った。

「そんな、そっちも言わないのに、こっちにだけ言わせようなんてずるいよ」

「そう？ま、そうね。お互い無理に詮索するのは良くないわね」

「そっだよ。フェアにいこうぜ」

「わかったわ。で、美香ちゃん？それとも沙織？」

「な、何を…」

「うふふ。真由美？俊子？」

中川は笑いながらこちらの顔色をうかがってくる。

「ひよつとして私とか…。ははっ、そんな訳ないよね」

自分で言っただけでウケているが、何気に的を得ているだけに僕はどきりとした。

「何言ってるんだよ」。もうこの話題は終わり！

僕はハラハラしてきて、話を打ち切った。これ以上追求されたらボロが出そうだった。

「なぐんだ。つまんないの」

中川は口を膨らませていた。それを見て、僕は自分で話を打ち切っちゃったけど、失敗だったのではないかと後悔した。「ひよつとして私とか？」と彼女自身が種を蒔いているのに、何の反応も示せなかった自分が情けなかった。冗談でもいいから反応するべきだった。そんな心の影響は身体にも出るのか、再び一気に差し込むような便意も襲ってきたが、それには耐えた。

話は再び日常的なものになり、僕達はだらだらと時を潰した。

その間、風雨は止むどころか勢いを増し、体育館にも数回雷音が鳴り響いていた。

「ふあゝあ…」

不意に中川があくびをした。

「あら、ごめんなさい」

そんな顔を見られたのが恥ずかしかったのか、彼女はまた頬を赤くしていた。

「そういえば眠くなってきたね。ふあ〜っ」
僕もつられてあくびが出た。

「どっちみち外には行けそうもないし、昼寝でもしようか？」

「え〜っ…、寝る？何処で？」

僕の提案に彼女は驚いているようだった。何気なく言ったつもりだったけど、彼女には考えられない話だったに違いない。そもそも僕みたいな劣等生は授業中に寝るのが当たり前のようになっていたが、彼女のような優等生は学校で寝るなどという行為は頭にないのだろう。

「ごめん、俺の頭で考えてたよ。中川さんみたいな人は学校で寝るなんてことないもんな」

「ふふっ、そっか。三上君は授業中いつも寝てるのね」

「まあね。昼寝出来なかつたら死んじゃうよ」

「ここだけの話、私もウトウトしてるわよ。ご飯食べた後ってどうしても眠くなるもん」

「へえ〜っ、中川さんでもそうなんだ？やっぱり昼寝は大事なんだなあ」

僕は一人で感心していた。眠くなっているのに我慢出来るなんて凄いと思う。僕にはそれに耐える力はない。

「確かにちょっと眠くなってきたけど、そんな所なんてあるのかしら？」

「その用具室にマットとかあるんじゃないかな」

と言って、僕は体育館の隅を指差した。そこには体育用具室があり、柔らかい運動用マットなども置いてある筈だ。とってから、僕はまた気付いた。

「あ、ごめん。また自分の発想で喋っちゃった。中川さん、そんな所じゃ嫌だよな？」

「別に嫌じゃないよ。私、結構何処でも眠れる方だし。部活で使うけど、確かにあそこなら柔らかいマットがあるわね。三上君もいるから安心だし」

中川は別に嫌がる感じもなく、あっさりOKした。しかも僕がいるから安心だなんて言うからびっくりした。

これは男のイメージなのかもしれないけど、体育用具室なんかはどうも綺麗な印象がないし、校内事件が起こる場所の一つだという印象がある。アダルトビデオなんかでも、女子高校生とエッチする（レイプする）場面によく使われているようだ。そんな場所を彼女が否定もしなかったのは少々驚かされた。純情なのか、それとも本当に僕を信用しているのか、どっちにしても悪い話じゃない。

「じゃ、あそこで寝よつか？」

「うん」

僕達は立ち上がり、用具室の方へ向かった。歩きながら、僕は密かに興奮していた。何もないとわかっていても、彼女の脇で眠れると思うと、自然と心も身体も昂ぶってくる。

薄暗い用具室は、ボールの入ったカゴやネット・ポール等の用具が所狭しと置かれていた。少しばかり汗臭いような匂いもしたが、許容範囲だった。彼女も特に気にしている様子はない。僕達は分厚く柔らかそうなマットがぐるぐる巻かれて立てられているのを見つけると、それを広げて地べたに敷いた。

「なかなか寝心地いいよ」

僕は早速寝転んで、その上を動き回った。

「そうね」

中川はちよつと遠慮気味に座る。だが、すぐに静かに身体を横たえ、

「ふあ〜っ。ホントに眠くなってきた…わ。おやすみ」

言葉と同時に彼女は目を閉じていた。

「お、おやすみ…」

あまりに早い寝入り方に僕は衝撃を受けた。本当に眠かったのか、彼女は早くも寝息を立てていた。寝顔がとても可愛らしい。しばらく見ていたいくらいだ。

実際に一分くらい眺めてから、僕も寝よつかとマットに横になっ

だが、意外と目が冴えて眠れなかった。中川が横にいるのが凄く気になったし、排便してないので腹が重たくて、寝付けないのだ。

僕はとりあえずこの隙にトイレに行くことにした。中川は完全に寝入ってしまい、気付く気配もない。音を立てないようにこっそりと用具室を出て、トイレに向かった。当然、汚かった体育館脇のトイレは回避する。それで風が吹き荒れる玄関の脇にあるトイレに入った。

ここの便器は綺麗だった。僕は一番奥の個室を選び、ズボンを下ろした。中川の寝姿を想像して未だに性器は半膨張している。見られている訳ではないが、何故か恥ずかしかった。なかなか萎みそうにないので、僕はそのまま和式用スタイルを取った。正直、大便是あまり出そうな感じではないのだが、ここでしておかないとまた後で苦しむハメに陥りそうなので、気張った。

「う、うん…」

思わず声が漏れる。肛門から小さい破裂音が何回も響いた。出たのは空気ばかり。早くしなければという焦りが、再び腹を頑なに、肛門を窄ませたようだ。

「うおっ…」

何とか一つの塊が抜け出した感覚があった。下を覗き込むと、指一本程度の大きさの便が水に浮かんでいた。踏ん張った割に成果は小さく、僕をがっかりさせた。腹もまだすっきりしない。しかしこれ以上の踏ん張りには意味がないように思えたので、尻を拭いて水を流して出る事にした。

僕はズボンを穿いて、手を洗い、鏡で髪型をチェックしてからトイレを出た。ハンカチを持っていないので、手を振って水を切った。残った水分はズボンの脇で拭く。再び体育館へ足を向けるが、いまだに腹が重い感じがする。とはいえないものは仕方がない。僕は今日の大便に関しては非常事態でもなければ諦める（というか気にしない）ことにした。

ただ一つ気掛かりなのは、腹が重いと頭も働かなくなる事だ。頭

が働かなくなるといふのは、要は大便がしたくなると切迫感から物事なんて考えていられないのだ。そんな心配はあるが、身体とは変なもので、僕はまた勃起していた。この勃起と便通のバランスがどうなるかが、今日のこれからの課題であろう。

僕は用具室の前まで来た、中川を起こさないように静かに扉を開ける。そして忍び足で室内に入った。近寄ってみたが、彼女は可愛らしい寝息を立てていて全く目を覚ます気配がない。脇に腰掛けて僕は興奮した。何とスカートが捲かれて、純白の下着がちらりと見えていたのだ。そして白い足がすらりと伸びて、妙に艶かしかった。寝ているその姿はこの上なくかわいくて、女性を襲う奴の気持ちは今なら理解出来るような気がする。自然と身体も反応していた。これまた無意識に僕の右手は己れの下半身に伸びていた。ズボンが風船のように膨らんでいて、その盛り上がりこそと触れる。気持ちがいい。膨らみはさらに一段階大きくなる。

僕は隣の中川を見た。完全に寝入っていて、夢の世界に行ってしまったている。眠り姫とはまさにこのことで、永久に起きそうにない。それに安心した僕は自分に歯止めが効かなくなってきた、さらに膨らみの先端を擦った。それもチラチラ彼女の白い太ももを見ながらだから、勢いは増すばかり。ついに我慢できなくなってきた、ズボンからはちきれんばかりの欲望を出した。物凄い怒張だ。僕は横に好きな女がいるのにこんな真似をする自分に驚くと同時に、欲望を吐き出したくてたまらない自分もいることに気が付いた。今ならまだ歯止めが利く。僕の中で二つの気持ち合せめぎ合いをしていた。

勝ったのは欲望に溺れた自分だった。いつしか僕は剥き出しの肉塊を激しく擦っていた。

横に眠る中川の姿態を見るだけで、亀がどんどん頭をもたげてくる。

「やばっ……」

その14(前書き)

だんだんとひどい内容に……。恥ずかしい！

この世に二人きり

ちょっと激しく触れただけで僕は一気に噴射してしまった。粘液を受け止めた手はべっとりとしていた。そして本当にマズい事に、白い液が少々中川のスカートに飛び散っていた。

男は放出すると一気に冷めるものだが、今ばかりは自分のした事を心から後悔した。気持ち良さに負けた自分が野獣のように思えて情けない。とても理性のある人間のする行為とは思えなかった。

それはともかく、一番の心配事は精液の付着が中川にバレないかだ。隣でこんな事をしていたのが露見したら、それこそ柳沢以下の変態扱い間違いなしだ。不安のためか、急激に腹痛が襲ってきた。僕は中川の様子をうかがいつつ、逃げるようにその場を離れ、再度トイレに向かった。

再び入った玄関脇のトイレで手をよく洗う。精液のねばねばは石鹸を使っても簡単に取れない。手がすつきりしないような感じはあるがそれは置いておいて、僕は大便器に跨った。踏ん張りながら、ぬめった性器も拭く。亀が涎を垂らすように、後漏れ液がとめどなく流れ出た。そんな間にも、腹は急激に圧迫されている。

「うっ…」

うめきと共に、たまりたまったものが一気に出た。僕は不安にかられるとよく便意を催す。よく言われる「ストレスを感じると胃が痛くなる」のと同じ原理だろう。今は特に「どうしよう?」という度合いが強かったので、差し込み方も凄まじかった。ここまですくと「気になって便が出ない」などということを超越して、多少軟便気味に尻から放出される。しばらく腹に残留していたからか、匂いはちょっとキツかった。

とにかく懸案の一つであった大便問題は解消された。僕は丹念に汚れを拭き取り、個室を出た。そして糞尿の香りがしないか自分のあちこちを嗅ぎ、大丈夫な事を確認すると、もう一度石鹸で手を洗

った。それと拭き取ったとはいえ、精液がこびりついた性器が気になったので、ファスナーから取り出し水道水で洗った。ひんやりして気持ち良かった。それをトイレレットペーパーで拭き、僕はトイレを出た。

腹はすっきりしたが、依然気持ちは不安なままだった。一番怖いのは、戻ったら中川が起きていた場合だ。何をしていたのか疑われるのはもちろん、精液に関しても気付かれてしまうだろう。当然、「トイレに行っていた」とぼける事は出来る。だが、精液が状況証拠になる可能性は高い。彼女の隣で変な事をしていた事実が露見する確率も高いだろう。その時に僕が知らぬ存ぜぬを貫き通す事が出来るだろうか。おそらく僕の性格的に無理だろう。まずは彼女が寝ているのを祈るのみだ。

静かに扉を開けると、中川の姿は横たわったままだった。そばへ近寄ってみるが、ちゃんと寝息を立てている。僕はひとまず安心して、脇で腰を下ろした。彼女のスカートの辺りに目をやると、いまだに白い下着が顔を覗かせていた。いや、今チェックするのはそんな事ではない。目を被災地に移すと、やはり少しシミが出来ていた。ただよく見ると、大きさは思っていた程でもなく、うまく寝入っててくれれば気付かれずに済みそうな気もした。僕は少し楽な気分になった。

さて、後はどうするか。一番いいのは寝る（振りをする）事だろう。眠れれば一番いい。寝ていた事にして、知らん振りを決め込めばいいのだ。

少しばかり安心したせいか、ちょうど眠くなってきた。僕は大きなあくびを一つすると、マットに横になった。隣に中川がいるのが相変わらず気にはなったが、さすがにもう一度あんな真似をする程バカではないし（一回しただけでも十分バカだが）、何だか疲れたので（その意味では自慰も良かったのか）、自然と意識が遠のいてきた…。

「うっっ…」

気が付くと、辺りは真っ暗だった。どうやら本当に寝てしまったらしい。僕は一気に起き上がって隣を見た。

「やっと起きたのね…」

中川は既に起きていたようで、膝を折り曲げて可愛らしく座っていた。と言つても、室内は暗くて顔までよく見えない。

「ごめん、俺一人ですつと寝てた？」

「私もさつき起きたばかりよ。起こしちゃいけないと思って電気は付けなかったけど」

「あ、俺、付けて来るよ」

僕は立ち上がり、暗闇の中をゆっくりと進んだ。実はあまり夜目が利かない方で、前方はほとんど見えていなかった。勘を頼りに歩くが、出口が何処かすらくわからぬ。

「大丈夫？」

僕の危うい歩調が気になったのか、中川が後ろから声を掛けてくる。

「大丈夫だよ。うわっ…」

言った矢先、僕は何かに足を取られて転んだ。ケガと呼ぶ程ではないと思うが、右手を強打してしまい、しびれるような痛みを感じる。

「もう…。大丈夫じゃないわよ、それじゃ」

中川は呆れたように言うと、僕の所まで来て起こしてくれた。差し伸べてくれた手が温かくて、僕は恥ずかしくなった。暗闇で見えないから良かったが、おそらく顔は赤くなっていたことだろう。

「ありがとう。実は何にも見えなくて…。俺、鳥目みたいで、暗い所で目が利かないんだ」

「そうなの？じゃあ電気付けるなんて言っただけじゃダメじゃない。私が付けるわ」

「ごめん」

と言つて、僕は彼女をよけるように立ち上がったつもりだった。

だが、

「きやつ」

彼女は僕の足に引つ掛かり、もつれて倒れ込んだ。それも僕の身体の上に。もちろん僕が狙ってやった訳じゃない。本当に偶然に足が絡まったのだ。

「あたた…」

いかに女子とはいえ、全体重が僕に覆いかぶさってきたので全身に衝撃が走った。プロレスで言う、フライングボディアタックをくらったようなものだ。

「ごめんなさい…。痛かったですよ？」

「いやいや…、大丈夫だよ」

実際痛かったけど、僕はそれ以上の喜びを感じていた。中川の柔らかな身体を全身で感じ取れているのだ。こんなにラッキーな事はない。彼女の身体からは匂い立つようにフローラルないい香りがする。それに誘われるように僕のおしべも反応していた。気付かれてはマズいと思いつつも、もはや制御不能だった。

「今、立ち上がるわね。あつ…」

何が起こったのかはよくわからないが、彼女は再びバランスを崩し、僕に身体を預けた。二つの柔らかい膨らみが僕の身体で弾み、同時に発した香りが鼻を刺激して脳にまで届き、理性をぶった切った。

「中川さんっ」

僕は彼女の名前を呼ぶと、その身体を抱き締めていた。先程一度発射した性銃は痛いと感じるくらい膨張していた。

「ちょ…っと、何するの？」

「好きだ！俺は中川さんが好きだっ！」

僕は絶叫していた。いくら臆病な僕でも、理性がなくなり、これだけのシチュエーションを与えられれば、告白の一つや二つに恐れる事はない。後の心配以前に、今の気分が勝った。

「なっ、嫌だあ、こんなの…」

彼女は身体を揺り動かし、僕の抱擁から逃れようとする。だけど所詮は女性の力、男の僕に敵う筈がない。拒絶する声が刺激的で、逆に僕を一層興奮させた。

「中川さんっ、俺が好きなのは君なんだ。それでさっき言えなかつたんだよっ」

僕は半ばヤケクソ気味に告白した。もうこうなつてしまえば今さら後には退けないし、言うだけ言ってしまった方が後悔もない。その上で、抱き締める両腕に力を込めた。

「そんなあ…。こんな状態でそんな事言われても…」

「そんなもこんなもないよ。好きだからこうしてるんだ」

「だったら離して。こんなの嫌よ」

「嫌だ。離さない」

「いい加減にして!」

中川は僕の抱擁から右腕を抜くと、平手打ちをくらわせてきた。

「痛っ…」

僕は思わず頬を押さえた。その隙に彼女は僕の腕をすり抜けて脱出し、暗い中部屋の出口目指して走り去った。

「待つて…」

そんな僕の声も届かず、彼女は暗闇の先へ消えて行ってしまった。僕も慌てて立ち上がり、ほとんど前が見えない状態で恐る恐る用具室の出口まで歩いた。やっと彼女が開いていった扉まで辿り着くと、まずは電気のスイッチを探した。相変わらず見えないので、勘を頼りに手を動かして壁をまさぐってみる。何かが手に当たった。僕はそれを思い切り押してみた。

「げっ…」

何とそれはガムだった。誰かが噛み終ったものを壁に付けておい

たよつだ。時間の経過で固まりかけてはいたが、やはり多少のやわらかさがあり、僕の手は粘ついた。
「くそっ」

誰に当たつていいのかわからないような怒りが渦巻いた。僕は思わず壁を蹴った。

「痛あつ……」

つま先に激痛が走る。蹴ったその場所はちょうど鉄で出来ていたのだ。僕は痛みに耐え切れず、あちこちを飛び回った。しばらく痛みはひかず、僕はさらに頭にきていた。とにかくツイてない。中川に逃げられたところへこのザマだ。「泣きっ面に蜂」とはまさにこの事だろう。

ガムよりもつま先打撲よりも、中川に平手打ちされて逃げられた心のシヨックの方が大きかった。もうダメだろう。僕にしてみれば一世一代の賭けだったのだが、やはりうまくいかなかった。「好きな女性に告白出来ただけでもすつきりする」などと言う奴もいるが、僕には後味の悪さしか残らなかった。もちろん告白の仕方が悪かった事もあるだろうが。

ともかくこのままではいけない。僕は再び電灯のスイッチを探し、ようやくそれを見つけた。急に明るくなったので、まぶしさに目が眩む。しばらくして目が慣れてきて僕は周囲を見渡した。扉が開け放たれており、その先は闇が続いている。中川はこんな状態の中、出て行つてしまったのだ。一人でいる事をあんなにも怖がっていたのに。

おそらく僕は嫌われてしまっただろう。もう口も利いてもらえないかもしれない。だが、彼女をこのままにはしておけない。僕は用具室を出て、彼女を探す事にした。

真つ暗な体育館は闇が広がっていて、とても薄気味悪い。大雨は続いているようで、雷の音がまだ聞こえる。目が利かない僕には恐怖感も倍増だった。こんな中、中川は何処へ行つてしまったのだろうか。僕は手を前にかざしながらゆっくりと歩んだ。後ろを振り返

ると、点けっ放しにした用具室の明かりが見えるので、それを目印になるべく真つ直ぐ進む。やがて手が壁に行き当たり、新たな方角を模索する。まずは体育館の電灯を点けたかった。確か例の汚いトイレの脇に、電源盤があつた筈である。だが、

「何でだよ？」

やっと電源盤に辿り着いたと思つたら、どのスイッチをいじつても一向に明るくはならなかつた。故障か、それとも心霊現象か、とにかくどうやっても点灯する気配はない。仕方なく、トイレに入って電気スイッチを押してみた。ここの明かりは点いた。ちょうど良い機会だったので、気分を落ち着けるためにも小便をしてトイレを出た。

とりあえず僕は玄関を目指した。校舎から出たがつていた中川なら、帰る事を優先する筈だと思つたからだ。

廊下も完全に明るさを失い、真つ暗だつた。見えるのは非常ベルの脇の赤い光のみ。僕は暗闇の中、壁に沿いながら歩を進めた。

正直、僕は怖かつた。夜の学校と幽霊話はつきものだが、本当に何かが出てきそうな雰囲気だつた。中川を探すという目的がなければ、こんな所を歩く事は絶対にしないだろう。今頃、彼女も恐怖と戦つているのだろうか。そう思うと、早く見つけなくてはならないという使命感のようなものが僕の中に湧いてくるのだつた。

そんな事を考えながら歩いてきた僕だつたが、いきなり横から突風が吹いてきて飛ばされそうになつた。いつの間にか僕は玄関に着いていたのであり、開け放たれた扉から暴風が吹き込んできているのだつた。とても立っていられる状況じゃない。中川がこんな所にいる筈もなく、また大荒れ状態の中帰つたとも思えなかつた。このままでは玄関を挟んだ逆側の校舎に行くことすら危うい。僕は来た道に戻る事にした。

玄関を離れた僕はゆっくりと体育館の方へ戻つた。途中、ハプニングもなく、僕は無事体育館まで着いた。遠目に、用具室の扉が開け放たれたまま薄明るい光を放っているのが見える。僕は用具室に

戻るつもりでいた。中川が何処に行つたかはわからないが、二人で行き違ふよりも片方は動かないでいた方が良いと思つたのだ。

いや、それは言い訳か。正直夜目が利かない僕は、これ以上暗がり歩くのが怖かつたのだ。それなら闇雲に探すより、明るい所で待っている方が安心だし得策ではないかと感じた、というのが本当の理由だつた。どうであれ、弱虫な僕は用具室へ帰り着いた。

「あつ……」

中に入った途端、僕は思わず叫んだ。中川が部屋にいたからだ。

彼女はマツトに腰を下ろしていた。予期せぬ事態が発生したので、僕は狼狽した。見つけたらどうしようかなんて、全く考えてなかつた。

「あ、いや、その……」

「私を探してくれていたの？」

彼女はいたつて普通に尋ねてきた。先程あつた事など、記憶にないかのように。

「あ、うん。戻つてたんだね」

「心配掛けてごめんね」

「いやいやいや……あの、その……」

抱き締めた話を持ち出して良いものかもわからず、僕はまたはつきりしない喋りをしてしまった。

「痛かつたでしょ？」

「えつ……」

僕は何の事かわからず、思わず聞き返す。

「平手打ち……」

「あ、いや、大したことないよ」

「ごめんなさい。私ったら乱暴で……」

「そんな……」

僕は謝られてばかりで恐縮した。悪いのはこっちだというのに中川は謝つてばかりいる。という事はあまり気にしていないのだろうか。おかげで僕も口に出しやすくなつた。僕は彼女に近づいて行つ

て、口を開いた。

「俺こそ…、俺の方こそごめん」

「びっくりしたわ。三上君があんなことするなんて…」

「自分でも驚いてる。臆病者の俺がよくあんな大それた事をしたよ」

「私もあんな事されたの初めてだったから、本当に動転しちゃって

…」

「えっ」

僕の耳は中川の「初めて」という言葉に鋭く反応していた。あれが「初めて」なら、裸で抱き合うような行為は当然していかない筈で、彼女は処女という事になる。それを想像しただけで、また僕の下半身は反応した。彼女に気づかれやしないかと思い、ちらりと目を移すが、目立つほどにはなっていないかった。

「別に三上君が嫌だった訳じゃないの…」

「そ、それって…」

僕の鼓動は急速に高まった。

「私から…言うの？」

「い、いや。俺から…」

彼女の「言う」というのは告白と受け取っていいのだろうか。どのみち先程一回やっているのだ、今さら尻込みする必要もない。僕は吐き出すように言った。

「な、中川さん、もう一回言うけど、好きだ。君が好きだ」

「うん。ありがとう…」

彼女の顔は真っ赤になっていた。これはうまくいったと思っっているのだろうか。しばらく間を置いて、彼女は口を開いた。

「私ね…」

「うん」

僕は被告人のように判決を待った。

「実は…服部君が好きだったの…」

「えーっ…」

衝撃の告白に、僕は一気に天国から地獄へ引きずり落とされた気分になった。しかし服部と中川の接点なんて、あまりない筈だ。ひよっとして服部の奴、僕にはあんな風に言いながら、裏で彼女にアプローチしていたのか。

「驚いた？」

「うん…。服部と何か接点あったの？そんな感じはしなかったから…」

「ううん。全然、接点なんてないわ。私の片思い…」

「へえっ、服部ってモテるんだね」

悔しかった。中川には何もしてない服部が、彼女のハートを射止めていたなんて。いつもは思わないのだが、この時ばかりは奴を少しばかり憎たらしく感じた。

「服部君って気さくに話し掛けてくれるじゃない？面白いし。そういうところがいいなあって思ってる…」

薄暗い電灯の下でも、彼女がまた頬を染めているのがわかった。

「そうだね。あいつ、うまく喋るもんなあ…。凄いよね。俺なんかいつも羨ましく思ってるよ」

僕は一体何を言っているんだろうという気分になっていた。抱き締めた事が不問に付されたのは嬉しかったが、告白したのにそれを流され、その上服部へののろけ話を聞かされては蛇の生殺し状態だ。僕はとてもやるせない気持ちになっていた。相手に好きな奴がいると知っただけで冷める僕は、彼女と一緒にいる事も苦痛に思えてきた。

「それでね…」

と彼女が言い掛けた時だった。尺球の花火を打ち上げたような物凄い音が体育館の方で響いた。

「うわっ、何だ？」

僕は少しビビって、思わず叫んだ。気のせいか、地面も少し揺れているような感じがした。

「凄い音……」

突然の轟音に、中川も不安そうだ。

「俺ちよつと見てくるよ」

僕が立ち上がったって体育館へ向かおうとすると、

「待って。私も行く」

彼女も付いて来ると言い出した。

「え〜っ、危ないかもしれないよ」

僕はそれを拒否した。「服部がいい」なんて言われたので、彼女が脇にいてもウキウキしないし、気分的に乗らなかつた。

「でも、ここに一人でいたくない……」

「わかつた。行こう」

懇願されては拒絶も出来ない。僕達は扉を開けて、体育館に出た。

その17

真つ暗な体育館は、何故か雨の降り注ぐ音がしていた。いや、実際に体育館に雨が降っていた。

「凄いな…。何だ、これは？」

「見て！」

中川が指差して叫ぶ。その方角を見ると、確かに屋根の辺りに違和感がある。暗くてよく見えないが、雨が屋根の一部から滴り落ちているようだ。

「なんかあの辺り、変だね。あそこから雨が降っているみたいだ」

「あそこ、穴が開いてない？」

「穴？あ、そうだ、穴か！あれは」

よく見ると確かに体育館の屋根にぽっかり穴が開いていたのだ。た。

「どうしたんだろう？雷でも落ちたのか…」

「ねえ、もう用具室に戻らない？ちよつと寒いし、こんな所にいるのは怖い…」

と言われてみると、確かにちよつと肌寒い。ずっと雨が降り続けているし（しかも今は体育館内にまで降り注いでいるし）、10月の夜という事もあって随分と気温が下がっているみたいだ。しかも暗闇の薄気味悪さが、身体からさらに温度を奪っていた。とはいえ、用具室に戻って二人きりというのも気が引けた。

「俺、もうちよつと様子を見るから、中川さんは戻っててよ」

「僕はそう言った。」

「えっ？」

「俺、ちよつと心配だからこの様子を見ていくよ。中川さんは危ないかもしれないから用具室に戻って」

「僕はもう一度言い直した。」

「う、うん…」

彼女は承知したようで、暗闇の中をゆっくりと戻って行った。心なしか寂しそうに見えたが、それは向こうの勝手な都合だ。そんな「一人でいるのが怖い」なんて理由だけで、一緒にいても僕は楽しくない。確かに僕だって少し怖い。だけど今はそれ以上に一緒にいる方が辛かった。

僕はとりあえず雨が降り注いでいる地点に歩を進めた。屋根に大きく開いた穴から直線的に雨が落ちて来ていた。外は今も暴風雨が Continuing しているようで、体育館の床も濡れて水たまりを作っている。上を見上げてみるが、どういう理由で穴が開いたのかは皆目検討がつかない。本当に雷でも落ちたのかもしれない。僕はさらにじっくりと上を見た。

「うわっぶ…」

いきなり雨の量が少なくなった上に向きが変わり、僕は顔面にシャワーを浴びた。おかげで服はびしょ濡れになってしまった。

「まいったなあ…」

さすがにこれでは用具室に戻るしかなかった。確かカバンの中には体操着が入っていたし、着替える事が出来るだろう。僕は少し重い足取りで用具室へ足を進めた。

「お帰りなさい！」

部屋に入った途端に中川の嬉しそうな声が響いた。それを聞いて僕は服部の顔を思い浮かべ、逆に悔しくなった。

「急にどしゃつと降ってきちゃって…」

「まあ！びしょびしょじゃない！大丈夫？」

「まあ…ね」

僕は素っ気なく答えた。

「体操着に着替えるから向こうを向いてもらっていい？」

「あ、うん」

彼女の返事を聞くと、僕はカバンを漁り、中からえび茶色をしたダサい体操着を取り出した。そしてびしょ濡れになったYシャツとTシャツを脱ぎ捨て、上半身裸になった。が、よく考えたら濡れた

身体を拭く物がない。僕がきよるきよると辺りを見回していると、
「カッコいい……」

と中川がうっとりとした声色で言った。見ると、彼女はこちらを向いていた。

「み、見ないでって言ったじゃん……」

僕は慌てて上半身を今まで着ていた衣服で隠した。だが、彼女は視線を逸らす風でもなく、じーっと僕の方を見続けている。

「恥ずかしいからさ、止めてくれよ」

「カッコいいわよ、三上君の身体」

「な、何を言うんだよ……」

自分では少し痩せ気味で気になっていたのだが、こんな事を言われたのは初めてで、僕は動揺した。もう一度裸体をさらすのは気が引けて、胸の辺りを隠したまま身動き出来なかった。

「バカにしてるのかい？」

「バカになんて……、筋肉質でカッコいいと思ったからそう言ったのに……」

中川は寂しそうな顔をしてそう言った。

「そんな事、服部が好きの人に言われても嬉しくないよ！」

僕は思わず不満をぶつけた。事実、嬉しいどころか苛立たしくて、コケにされている気分だった。

「私が？服部君を……？」

彼女はとぼけているのか、「何を言っているんだ？」という顔で僕を見る。

「そうだろう？さっき服部が好きだったって言ってたじゃないか！」

「さっき……？ああ、服部君に片思いしてたって話のこと？」

「そう。確かにそう言ったじゃん？服部が好きなんだろう？なのに俺をカッコいいなんて言って、バカにしてるとしか思えないよ」

「あははっ」

いきなり彼女は笑い出した。僕はその態度にさらに頭にきて、力
ーッとなった。

この世に二人きり

「ふざけんな！人をバカにするにも程があるぞ！俺をなめやがって
！」

その18 (前書き)

エロいです。そういう描写が嫌いな方は注意です。

恥ずかしい…

この世に二人きり

「ご、ごめんなさい…。三上君があまりに勘違いしているもんだから、つい…」

中川は申し訳なさそうな表情になって、僕に詫びた。が、何だか妙な物言いで、僕はまだすっきりしない。

「勘違いって何だよ？俺が何を…」
と言い掛けた時、

「私、今も服部君が好きだなんて一言も言っていないわよ」
彼女のきつぱりとした発言が押さえ込んだ。

「だって…」

「服部君が好きだったって言っただけじゃない？それ以上の事を何か言ったかしら？」

「うっ…」

言われてみれば確かにそうだ。僕は「服部が好きだった」と聞いて、勝手に今もそうなのだと思います。入っていた。

「ごめん。強く言い過ぎたわ」

「いや…」

「私、今まで三上君の事をよく知らなかったし…、えっと、遅刻して歌ったりして面白い人だとは思っていたけど、好きとか嫌いとか、そういう感情で見たことはなかったわ」

喋りながら彼女の顔は上気していた。

「だけど…」

「だけど？」

その後の言葉が気になって、僕はすぐに問い返した。

「だけど…、今日こんな風に二人きりになってみて、三上君凄く優しくて頼もしくて…」

「そ、そんなことないよ」

褒められて僕は照れた。

「ううん、三上君のおかげで今日は楽しかった。こんな辛い状況だったけど、貴方がいてくれたから…」

「中川さん、ごめん。俺、ひどい事言っちゃって…」

「どうやら僕はひどい勘違いをしていたようだ。」

「私こそごめんなさい…。誤解を生むような事を言っちゃったわ。」

服部君の話しかしない内に体育館で凄い音がしたから、続きが言えなかったの。もし良かったらもう一度話してもいい？」

「もちろんだよ。俺も早合点しちゃったし、改めて答えを聞きたいな、さっきの…」

何だか良い方向に行きそうではあるが、僕は逆に緊張してきて全身が浮ついたような感じがした。上半身は着込んでいなかったが、寒さを感じないくらい熱を帯びていた。

「あのね、今日三上君と一緒にいて、こんな人が…、こんな人が彼女だったらいいなって思っていたの…。そうしたら…」

彼女はここで口をつぐんでしまった。恥ずかしいのか、顔は最高潮の赤さだ。僕も自分では見えないが、顔が熱かったし真っ赤になっていた事だろう。しばらく二人共黙っていたが、やっと彼女の方から口を開いた。

「そうしたらあんな風に…」

「あ…、ご、ごめん。せつかくそんな風に思ってくれていたのに俺が…」

彼女の言う「あんな風」とは、僕が「好きだ」と言いながら抱き締めた事に違いない。

「ううん、ホントはね、嬉しかった…。あんな風に告白されたのなんて初めてだったからびっくりして動転しちゃったけど、本当はあの時、凄く幸せな気分だったの…。お互いの身を寄せ合う事で心まで癒されるなんて、初めて知ったわ」

「中川さん…」

「ただ、あんな状態で告白に答えちゃったら、はしたない気もしたの。当然、びっくりもしたし…」

「ごめん、ホント…俺が悪かったよ。俺も告白なんてしたことなくて、今日の午前中からずつと言おう言おうと思いながら言えなくて…。で、偶然あんな状態になってしまったもんだから、もう言うしかないと思ってね…」

彼女が本心を話してくれたので（しかもうまくいきそうな感じなので）、ようやく僕も心の内を吐露することが出来た。「告白なんてしたことがない」などと「告白」をするのは恥ずかしかったが、これも彼女が言いやすい雰囲気を作ってくれたおかげだ。

「三上君、告白した事がないってホントなの？」

期せずして、彼女にもそこが引つ掛かったらしい。そんなに珍しい事なのだろうか。それとも僕がそういう風に見えないという事なのか。

「本当だよ。俺、好きな子に彼氏や好きな男がいたりすると、それだけで気持ちが悪えちゃってさ、大体今までそうだったから、告白なんてした事がないんだ。カッコ悪いでしょ？」

「そんな事ないよ。私もそう。好きな人に別の相手がいるともうダメ。告白された事は何回かあるけど、自分からした事はないんだ…」

「そっか。中川さんもそうなんだ？一緒だね」

「ふふっ、そうね。あっ、ひよつとして私がさっき服部君を良かったなんて言ったもんだから、三上君気にしちゃったの？」

「実は…そうなんだ。俺って心が狭いね…」

「そんな。私が服部君の話なんて持ち出したのが悪かったのよ。経緯を説明したくて…。ニユースで事件の解説してる訳でもないのにね。だから、三上君の心が狭いなんて事はないわ」

「ありがとう。そう言ってもらえると気が楽になるよ」

僕は一生懸命こちらを立ててくれる中川の気持ちから嬉しかった。だからもう一度言いたかった。

「な、中川さん、好きだ。俺は君が好きだ！」

「うん、ありがとう。私も三上君が好き…」

ちよっとうつむき加減に彼女は言った。やっとこの言葉が聞けた。

「ほ、ホント？」

僕は嬉々として問い返した。

「ホントにホントよ。私は貴方が好き」

「す、凄いや。信じられないよ。ずっと片思いのままかと思っ
たからさ」

僕は夢見心地だった。過去において、こんな事はそれこそ夢か妄
想でしか起こらなかった。彼女の返事を聞いてなお、信じられな
かった。

「それって…、お、俺と付き合ってくれるって…」

「うん…」

彼女は頷いた。

「ねえ、そっち行っていい？」

「あ…、う、うん…」

僕が返事をする、彼女はこちらへすり寄り寄ってきた。僕は緊張し
て身を固くした。しかも上半身はまだ服を着ずに胸の辺りを隠した
だけで、恥ずかしいっついたらない。だが、彼女は僕の隣に来て、ぴ
たりとくっついてきた。花の香りが僕の鼻をくすぐった。

「ね、座ろっ」

彼女はそう言つと、体育座りをして僕を同じ体勢に誘う。

「ち、ちよつと待つて。こんな格好じゃ…」

僕は慌てて体育着を掴んで、頭から被った。そして、彼女が望む
ように脇に座った。互いの身体が脇で触れており、僕は緊張と興奮
を同時に味わっていた。これからどうなるのかと思うと、期待で胸
と下半身が膨らむ一方、童貞の僕がうまくやれるのかという不安も
襲ってきて、喉がからからに渴いてきた。

「どうしたの？」

中川はそんな僕の状態を感じ取ったのか、尋ねてきた。

「い、いや…何でも…」

「そっ？何か変よ」

「き、緊張してるんだよっ！女の子が隣にいるなんて慣れてないか

らさ」

僕は正直に言った。

「え〜っ、そうなの？」

「中川さんはそういうのなの？」

一瞬、僕の頭を変な考えがよぎった。ひよつとして中川は処女じゃないのでは？だからこんなにも平然としていられるんじゃないだろうか。

「私は…、緊張とかより、こうしてるだけで幸せな気分だから…」

と言つて彼女は脇から僕の腕をぎゅっと掴む。やられた僕は身が締まるようにきゅんとなった。心臓が激しく波打っているのが自分でも分かる。もう処女かどうかなんてどうでも良かった。僕もある意味「幸せ」を感じていたのだから。

「中川さん…」

僕は彼女をじっと見つめた。その瞳は閉じられていた。これは言うまでもなくキスを待っているのだろう。僕の緊張は最高潮に高まっていた。僕はゆっくりと顔を近付けていった。手と口唇が震えている。今までに経験した事がない程の緊張感だ。身体が風船のように破裂してしまつのではないかと思うくらい鼓動を打ち、頭の中も真っ白になりそうだった。でも、僕は口唇を近付けた。そしてついお互いの口と口が触れた。僕は一瞬自分の存在を見失った。口唇が触れていた数秒間、僕は彼女と共に空気に溶け込んだような気がした。何とも甘い僕のファーストキスだった。

「んっ…、素敵…」

彼女の口から甘美な声が漏れる。それを聞いた僕の心に火が着いた。

「中川さんっ」

僕は思い切り彼女を抱き締めた。柔らかい肌の感触が心地良い。さらに匂い立った女性のいい香りが欲望の防波堤を決壊寸前に追い込む。

「幸せ…」

僕に抱かれている彼女に嫌そうな様子は全くない。むしろ僕の首から背中に手を回して、胸に顔を埋めている。僕はその頭を優しく包み込むように抱いた。

「はあっ…はあっ…好きだ…」

興奮で少し息を切らしながら僕は言った。「好きだ」という言葉を一体何度言った事だろう。明らかに僕みたいな奴が多用すべき言葉ではない。ひよつとすると、一生の中で今日が最も「好きだ」と言う日かも知れない。

「わ、私もっ！」

中川はそう言うのと僕にキスしてきた。それもさっきのような軽いものではなく、舌を絡ます濃厚なキスだった。中川が僕の舌を吸い、唾液を飲んでいる。信じられない事が目の前で展開されていた。僕の下半身ははち切れんばかりに膨張していた。

口唇と口唇が離れて、僕は思わず唾を飲んだ。多分、その中には自分のだけではなく、中川のも混じっていただろう。僕は正直焦っていた。一人でする以外の性行為経験がない僕には、本やビデオで見たような知識しかなかった。それもすっかりとは覚えていない。どうやって触れたら良いか、どうやったら気持ち良くなってもらえるか、僕には自信がなかった。

「三上くうん…」

中川は甘えるような声で身を寄せてきた。これはOKという事なのだろう。

「な、中川さん…、その…」

こんなところで僕の弱気が出る。こういう場合、普通ならいちいち承諾なんて得ないものだ。でも僕は彼女がOKしてくれないと心配だった。もし嫌だと思っていたら無理強いはしたくない。

「いいの。三上君になら…」

彼女は少し緊張したような表情をしていたが、覚悟は出来ているようだった。

「じゃあ…」

それを聞いた僕は恐る恐る彼女の身体に手を伸ばした。指が震えているのが自分でも分かる。戸惑う僕はひとまずもう一度彼女を抱き締めた。そして口唇を近付ける。

「んんっ…んむっ…」

僕達は口の中を互いの舌で貪り合った。彼女の身体から徐々に力が抜けてくるのが分かる。僕はそのまま彼女の身体をマットに押し倒した。

「恥ずかしい…」

顔を真つ赤にしてマットに横たわる中川の姿は妙に艶めかしかった。白い太もも、そして純白のショートも見えるか見えないかくらいの微妙な感じで顔を覗かせていた。キスで興奮したまでは良かったが（実際彼女にバレているのではないかと思うくらいズボンの一部は盛り上がっていた）、僕は彼女の肢体を目の前にして再び臆してしまった。まるで豪華な料理が出されているのに、どうやって食べたら良いかがわからない客のようだった。

「どうかしたの？」

ためらう僕に気付いたのか、尋ねてくる中川。確かにこのままではまずい。僕は意を決して彼女の身体に手を伸ばした。

「何でもないよ。触れるよ？」

僕は彼女に覆い被さるように抱きつき、いきなり胸に触れた。

「きゃっ…」

驚いた彼女が叫びを揚げる。僕は触り方が悪かったのかと思い、一瞬躊躇したが、彼女の顔を見るとそうではないらしいと分かったので、我ながら稚拙な手の動かし方で愛撫を続けた。

「あっ…う…」

中川の口から声が漏れる。それを聞くと正解のような気がして、僕は安心して興奮した。調子に乗った僕は、彼女のブラウスのボタンを外しにかかった。

ところがそんな僕の手は緊張で震えており、ボタンをうまく外す事が出来ない。僕はマンガ『あしたのジョー』で、主人公のジョー

がパンチドランカー症状で手が震えて他人のボタンを外せなかった場面を思い出していた。もちろん僕はパンチドランカーなどではない。では何でそんな事を思い出したかと言うと、ボタンが外せない事への焦り・苛立ちが共通しているからであろう。

とにかく僕は焦っていた。ボタン一つ外せないような男は、中川に軽蔑されてしまうのではないかと不安でたまらなかった。そんな不安が指の動きをぎこちなくさせ、さらに脱がせる時間を遅らせる。「三上君、ひよっとして緊張してる?」

ついに彼女から尋ねられた。

「あ、いや…」

僕はどぎまぎして、まともに答えられなかった。ついにバレてしまった。何と恥ずかしい事だ。女にダメな男とレッテルを貼られる程、自信を失うことはない。インポになる男の気持ちがわかる気がした。

「そんなに心配しなくてもいいよ。私だって初めてで緊張してるんだから…」

と言うと、中川は僕の右手を自分の左胸の辺りに当てた。

「な、中川さん…」

僕はまた違った意味でどぎまぎした。僕の手の触れている部分はお湯が沸騰しているかのように激しく音を立てていた。彼女の言っている事は嘘ではなく、本当に緊張しているのだろう。

「ね、だから一緒よ」

「う、うん…。ありがとう…」

僕は彼女の気持ちが凄く嬉しかった。人によってはこういうのは「バカにされた」とか思うのかもしれないが、そんなプライドもない僕にはただただ彼女の優しさがありがたかった。僕は何とない女なんだろうと思ひ、改めて惚れ直した。

「三上君…」

驚いた事に、中川は自分でブラウスのボタンを外していた。白くシンプルなデザインブラの姿を見せ、僕は下半身に血液が流れ込

むよつな感覚を覚えた。これは彼女が僕に配慮したのだろうか？と
にかく便乗しない手はない。

「凄い…。綺麗だよ」

僕はそう言うと、首筋に吸い付き、今度はブラを剥ぎ取るうと試
みた。

「あつ…、ああつ」

白い首筋に舌を這わす度に中川の口から声が漏れる。当然、僕は
それに興奮していたが、同時に焦ってもいた。と言うのは、今度は
ブラの外し方がわからなかったのだ。ホックがあつてそれを外せば
取れるというような知識は持っていたが、そのホックが何処にあつ
て、どのように外せばいいのかは全くわからなかった。こんな事な
ら母親のブラジャーでもよく見ておけば良かったと思う。僕は愛撫
する振りをして、必死に彼女の胸の出口を探した。

「首…好きなの？」

「あ、いや…」

僕はズバリと指摘されて、また口籠もった。とりあえず首筋を愛
撫してごまかしていたつもりだったが、逆に不審を招いてしまつた
か。焦る気持ちに拍車が掛かってしまった。

「いいよ。続けても…」

「あ、うん…」

そう言われると逆に首を責め辛い。僕は何処に触ればいいのか
迷ってしまった。目と手はしばらく中空をさまよつた。

このままではいかんと思った僕は、とりあえずキスをした。

「んんっ…」

これは正解だったようで、彼女は舌を絡ませながら身体を密着さ
せてきた。僕はとりあえず彼女の身体をさするように触った。彼女
の肌は温かく柔らかかった。触れる度に温度を増し、ぴったりとく
つついてくる。おかげで僕は比較的愛撫しやすくなった。べたべた
触って抱き締めて、再度その隙にブラのホックを探した。

「あつ…んっ…」

悩ましげな声が漏れる。普段の中川からは想像も出来ないような声だ。それを僕だけが聞いているのかと思うと、妙な優越感に浸れるのだった。そう考えると、もっともっと声を揚げさせたくなった。僕はホックを探しつつ、ブラの上から胸を揉んだ。布に包まれながらも弾力があり、並々ならぬその大きさがうかがえる。

「いやっ…あ…ん」

段々激しくいやらしくなる彼女の声に、僕の下半身は爆発寸前だった。ズボンを突き破らんばかりに伸び上がり、彼女が見ても一目瞭然だった。

「す、凄い…」

棍棒みたいな僕の部分を見て、彼女は驚いていた。今からそれが自分の体内に入る事はわかっていているのだろうか。いや、わかっているからこそ驚いているのだろう。

僕もこんなにかわいい中川の体内に自分の下半身が埋め込まれるかと思うと、興奮極まって今にも噴出してしまいそうだった。僕は無我夢中で彼女の身体をまさぐった。すると、偶然ブラの辺りで何かが手に触れた。

「あつた！」

僕は思わず叫んでいた。

「ど、どうしたの？」

中川は驚いてこちらを見る。

「い、いや、何でもないよ。驚かせてごめん」

僕は謝ると同時に、ようやく見付けたホックを外してブラを剥ぎ取った。

「きゃっ…」

中川は慌てて胸を隠す仕草を見せるが、上半身が露わになっているので大した意味はなく、これ以上ないくらい真っ赤な顔をして恥ずかしそうだった。

「見せて」

僕は耳元に囁くように懇願した。

「恥ずかしい…」

「大丈夫だよ。綺麗だよ」

と言うと、僕は胸を覆い隠している彼女の腕を開いた。現れたのは二つの果実のついた白い膨らみだった。

「やだ…」

僕に胸を凝視されて、彼女は顔を背けた。気にせず見つめ続ける僕。

「凄いや。美しい…」

決して嘘でもお世辞でもなく、そう思った。均整の取れた双方の盛り上がりは彫刻のように美しく、生気が漲る分さらに素晴らしい物のように見えた。僕は多少怖じ気づきながらも、両手で両方の乳房に触れた。

「あつ…」

今まで感じたことのない感覚だったのだろうか。彼女は若干戸惑いにも似た表情を見せた。

「柔らかい…」

僕は感じたそのままを口にした。スポンジ、いやマシユマロ、そんな物を連想する柔らかさが両手一杯に広がっていた。その弾力性のある肉塊に触れているだけで気持ち良かった。

「何か恥ずかしい…」

気が付くと、彼女の顔から身体にかけて、桃色が浮かんできていた。これはいい印に違いないと勝手に思った僕は、もうワンステツプ進もうと胸に触れる手に少しばかり力を入れた。

「ひゃあんっ…」

彼女の口から仔犬のような声が出た。僕の手はハンドグリップでも握るように、乳房を揉みほぐしていた。手に余る程の大きさをしているため、握力が弱い僕はトレーニングでもしている気分だった。もちろん過酷という言葉とは程遠いトレーニングだったが。

「はむっ」

トレーニングに疲れた僕は、つんと立っている乳首にしゃぶりつ

いた。赤子の時以来の感覚だ。と言ってもそれがどんなだったかは覚えていないけれど。

「あんっ……」

またもかわいらしい声が彼女の口から漏れて、僕の脳髓を刺激する。僕は気性の荒い競走馬のように興奮して、胸にむしゃぶりついた。舌で実から周辺まで舐め回した。

「いやっ、はあんっ……」

次々に普段は聞けないような声が聞こえてくる。僕をしている事で彼女が感じているかと思うと、誇らしい気分になる。

僕はそれからしばらく胸を舐め続けた。彼女の反応も良く、やってて気分も悪くはないのだが、一つの疑問が頭に浮かんでいた。いつまで舐めていけばいいのだろうか？

実際、僕にはその程度がわからなかった。下半身は膨らみすぎる程に膨らんでいて、早く行き場を求めている次第なのだが、ここからどうやって入り口のドアを開けるのが全くの未体験ゾーンだったのだ。

しかしいつまでもこうしていられないのはわかっている。僕は胸を吸いながらも、意を決して右手を彼女のスカートの間に滑り込ませた。

「あっ……」

彼女が驚いたような叫びを揚げた。声は出さなかったが、同時に僕も驚いていた。僕の指が触れた彼女の下着は、まるでお漏らしでもしたかのように湿って、いや、びしょ濡れだったのだ。女のあそこはこんなにも濡れるものなのか。当然、感じてくれてこの洪水なのだろうが、これをこれからどう処理したらいいのかと思うと急に緊張してきた。

こんな時に、武田信玄は好色で女の扱いもうまかったから治水工事も出来たのか、なんていう馬鹿な考えが一瞬頭をよぎった。一体僕にこの中川の股から溢れ出す洪水の治水が出来るのだろうか。

そうだ。武田信玄と言えば、僕がHな事に目覚めたのも実は彼が

原因なのだった。武田信玄とHに何の因果関係があるのかと言われるそうだが、先にも言った通り、武田信玄には妾がたくさんいて、好色だったという説があるのだ。それと僕のHに何の関係があるのかというと、話は小学校5年生まで遡る。

僕は当時結構歴史好きで、戦国時代の英雄の伝記や漫画、果てはTVゲームにまで夢中になっていた。そして、今や全く見なくなってしまったが、当時NHKの大河ドラマは「武田信玄」を放映していたのだ。もちろん僕も夢中になって見ていた。最近の視聴率は20%を落ち込む事もあるようだが、その頃は40%近い高視聴率を弾き出す人気番組で、世の中の信玄ブームもなかなかのものだった。信玄の漫画も5種類以上あったように思う。僕は父親に買ってもらった一冊だけに飽き足らず、他の数種類にも興味があつて手を伸ばした。その中のある一冊を見て、僕は驚いた。原作がそうなっているからなのか、信玄の恋愛模様が細かく描かれ、側室との絡みのシーンまでたくさんあつたのだ。恥ずかしながら、僕はそれで一人Hを覚えた。漫画で勃起して、信玄と側室がSEXしているシーンを想像して初めて放出した。だから僕のHの師匠は武田信玄であると言つても過言ではない（厳密に言つと、その漫画家なのだろうが）。ふとした拍子にこんな事を思い出したのも、おそらく二人Hへの入り口に立つたからに違いない。これも何かの啓示であると考えるのなら、僕も師匠・武田信玄の騎馬隊のように勇猛果敢に突き進まなくては。

そんな思いで中川を見据えると、彼女は羞恥に耐え切れない様子で、両手で顔を覆い隠していた。今ならどうにかなる。僕は相手の虚を突きパンティを剥ぎ取ると、槍を突き出すように浸水地に指を延ばした。丸く尖つた中指の先端が地に突き刺さる槍の如く、秘宮に勢い良く飲み込まれていった。

「ひゃあっ」

悲鳴にも近い声が漏れる。すっかり信玄気分の僕は、敵將の首を取り、相手の姫を捕らえたかのように錯覚しかかっていた。虐げら

れているような中川の顔がたまらなく魅力的で、僕は槍の先端を激しく突き動かした。

「いやっ…はあっ」

指が面白いように突き刺さり、中を掻き混ぜる。戦場では殺戮に兵士が昂揚して、無法な行動を取る事があるという。それと同じに考えていいのかわからないが、この時の僕が中川のあられもない姿と喘ぎ声に平静を保っていられないほど興奮していたのは事実である。僕は中川の秘所のあまりの滑らかさに、突っ込んだ槍先をさらに一本追加した。

「あっ…、やんっ…」

中川の下半身に突っ込まれた僕の二本の指先は淫らな音を立てて動き回る。ちょうど中川の声とリズムを取って、心地良い調子だ。僕自身、リズムと調子に乗り掛けていた。ところが、

「痛いっ…」

中川が悲鳴のように叫んだのを聞き、僕は正気に戻った。

「初めてなのよ…。もう少し優しくお願い…」

「ご、ごめん。調子に乗ってたよ、俺」

戦国時代から戻った僕は、もう武士ではない。いつの間にか平民に戻って、平謝りに謝った。

「大丈夫。優しくしてくれれば…」

少し潤んだような目をしながら、中川が言う。

「ホントにごめん。俺、初めてでどうしたらいいか、頭が一杯で…」

「いいの。途中までは凄く気持ち良かった」

「そう？なら、良かった。もう少し優しく触れるようにするよ」

と言いながら僕は彼女の裸身を見つめていた。そして薄らと生い茂った部分を見て、また別な気持ちで沸き起こってきた。

「ごめん」

僕は再び頭を下げた。

「もういいよ」

彼女は僕を慰めるように近付いてきた。僕はもう一度頭を垂れた。

しかし、それはフェイントだった。僕は下げた頭をモグラのように伸ばして、中川の茂み目指して突き進んだ。

「きゃっ」

僕の舌がざらついた感覚を得たのとほぼ同時に叫び声が揚がった。僕の舌は彼女のジャングルの奥を捉えていた。

「うぷっ」

中川の濡れた秘所を舐めた時、口にはしなかったが、そんな言葉が脳裏に浮かんだ。女の花園と言えば何となく芳しいものを想像していたのだが、やはりそれは想像の産物に過ぎず、生物的な汗の混じったようなしょっぱい味を主成分とする飲料のようだった。味は違うが、青汁を飲んだ時のような感覚が口中に広がる。

だが、不思議な事にこれが止められない。「良薬は口に苦し」ではないが、中川の声による反応が確かにある事が確認出来ると、それがまた爽快で、苦味のある汁を啜る行為を続けてしまう。「何をやってるんだ、僕は」と自分でも思うのだが、答えなど見つからぬままにただひたすら行為に没頭してしまう。当然吸ったことはないが、麻薬とはこんなものなのかもしれない。ともかく僕は夢中になってグチヨグチヨの部分舐めてしゃぶって吸った。

正気に戻ったのは、顎の筋肉に張りを感じた為だった。あまりに口を動かし過ぎたのか、下顎の辺りが麻痺したような感覚を覚えた。僕はジャングルから抜け出し、しばらく振りに中川の顔を見た。彼女の顔は上気して桃色に染まり、しかも酒に酔ったかのように惚けた表情をしていた。

「気持ち良かった…」

そんな彼女の呟きを聞いて、僕の下腹部は一気に反応した。さっきまでの湿り具合なら、僕を受け入れる事が出来るんじゃないだろうか。そう思った僕は、思い通りにいかないきかん坊のような器官棒を彼女の入り口にあてがった。

その19 (前書き)

相変わらずヒロイのでじ注意!

この世に二人きり

「いい？」

と聞くと、

「うん…」

と小さな声で頷いた彼女は、これから待ち構える苦痛が予想出来ているかのように、目をつむった。

僕は思わず生唾を飲み込み、下半身を軽く突き出した。だが、僕のモノは濡れそぼっている入り口から外れ、彼女の腹の上に不時着してしまふ。こんな事を二度も繰り返すと、経験不足な僕は焦ってくる。

僕は今度は右手で棒の中程を掴み、慎重に彼女の入り口に先端をあてがった。そして、今度は成功するだろうと、一気に押し入った。「痛っ…。違う…。そこじゃないっ！」

彼女が不安げな顔で言う。

「ご、ごめん」

僕は額から汗が流れ出し、ますます焦ってきた。慌てて一度差し込んだモノを抜き取り、申し訳ない気持ちを示すかのように指で押さえ付けた。

もう失敗は出来ない。僕は緊張で若干指を震えさせながら、再び亀の頭を入り口に向かわせた。

「あっ…」

という声が揚がるのと同時に、今度は流れるようなスムーズさで中へ潜り込んでいった。先程が引っ掛かるような感覚があったのに比べ、今のは何の摩擦もない滑らかさで、僕の下半身がウナギにでもなつたみたいに滑った。

「入った…」

僕は思わず感嘆の言葉を漏らしていた。中川の顔を覗き込むと、苦痛に耐える様子ではありながらも、何処となく充足感が漂う表情

に見えた。そこまでは良かった。

「うっ……」

僕の意に反して、情けないうめき声が出た。その訳は、僕の下半身を取り囲む中川の柔肉のあまりの気持ち良さだった。

元々僕は一人でやっていても、そう長くもつ方じゃない。そんな僕にとつて、初めての女の肉の包み込むような、それでいてぬるぬるした感覚は、早期射精を促すに十分な刺激であった。亀の頭が爆発するようなイメージが浮かぶと共に、頭の中でカウントダウンが聞こえてきた。（用意。三、二、一、発射！）

「ああっ……」

武田騎馬隊が鉄砲隊に敗れた瞬間であった。勇猛果敢に挑んだ僕の長槍も飛び道具の威力には敵わなかった。その力は尽き、突き刺していた相手の肉塊から血痕とともにするりと抜け落ちた。武田家が織田信長に敗れた訳がわかったような気がした。

しかもこれは単なる敗北ではない。かなりの失敗付きだ。お互い初体験にして、中出ししてしまったのだ。我ながら「やってしまった」という気持ちになり、中川の顔を見るのがためらわれた。

「三上君……」

囁くような中川の声が耳に入る。僕は覚悟を決めて、彼女に向き直り、

「ごめん。あまりに気持ち良くて……」

と謝罪の意を述べた。

しばらく沈黙が流れた。中川が怒っているように思えて、僕も次の言葉が続かなかった。今更取り返しのつかない事とはいえ、お互い気持ちの整理はしなければならない。

「あの……」

「あの……」

二人同時に同じ言葉が出た。どちらもこの沈黙が気まずかったに違いない。

「な、中川さんから言ってよ」

僕はそう言っ、彼女の次の台詞を促した。

「えっ…、うん。あの、まあ…その…」

言い辛いのかなかなか核心に触れる内容が出てこない。

「私…気にしてないから」

「えっ？」

僕はちよつと耳を疑っ、もう一度聞き返した。

「さっきの…、気にしてないから」

中川はそれだけ言っ、真っ赤になっ、うっむいてしまった。

「そ、それっ、俺が中へ出した…？」

アホみたいな話だが、僕はもう一度聞いてしまった。中川は黙っ、てうなずく。どうやら本当に怒らさず許してくれるらしい。ホッとした僕だったが、

「三上君、ちよつとそれ…」

「えっ？」

中川に言われ、指差されたところを見ると、さっき萎んだ筈の長槍が再び鋭い剣先を取り戻していた。

「あはは…」

僕は恥ずかしく、笑っしかなかった。それをものともせぬような勢いで屹立は続いた。僕は冗談めかして言っ、

「もう一回する？」

「うん…」

中川はまんざらでもないよう、小さく頷いた。思えば彼女にしてみれば先程までの行為は、痛いだけで何の快楽もなかったかもしれない。再度の痛さ以上に、「もう一度」という気分になるのもわからないでもない。

「よし」

僕は無意味に気合を入れ、再び彼女に向き直った。先程までの不安など、いつの間にか何処かへ消え去っていた。

その20

「三上君、ありがとう」

中川が身体を密着させながら言う。僕たちは裸で隣同士寝転がっていた。

あの後、僕達は都合二回（計三回）行為に及び、精も根も尽き果てて、横になっていたのだった。最初の一回程早くはなかったが、中川の中の相変わらずの気持ち良さに、僕はその後の二回共中出ししてしまった。そんな情けない僕を、彼女は広い心で許してくれたのだった。

中川自身、二回目までは痛がる素振りを見せていたが、三回目にはよがり始め、僕は肉体的にも精神的にも満足した。とはいえ、さすがに三度目にもなると下半身も痛くなってきた、「俺は何をやっているんだろう?」と思う自分が出現した。

冷静になって考えてみると、女の身体の中に自分の下半身を突っ込んで腰を動かしている様は何とも滑稽に思えた。「こんな事が何故気持ち良いのか?」とも思ったが、一度入れると腰を動かすのを止められない。神の決めたシステムか、それとも遺伝子のなせる業か。こんな行為から新たな生命が出来る事に、また不思議さを感じる。

「…君、ねえ…」

「はっ」

中川が背中を揺す振っているのに気付いて、僕は妄想の世界から帰ってきた。

「ちゃんと二人で話そうよ」

「ご、ごめん。つい考え込んでいて…」

「それってこの状況のこと?」

「あ、いや、まあ…」

彼女の言う「この」がSEX後の状況を指しているのか、それと

も二人きりで外界から遮断された状況を指しているのかはわからないが、僕は曖昧に返事をした。

「考えたくもなるわよね。本当に何なのかしら、この状況は？」

「うん：本当に不思議だよね」

彼女の意図するところがわかってようやく話についていけそうだった。

「そもそもどうして今日、誰もいないのかしら？」

「俺もそれはずっと思っていたけど…」

「私ね、こんな事言ったらバカにされるかもしれないけど…」

と言うなり彼女は口を噤んでしまった。

「何だよ？ 思うところがあるなら話してくれよ」

「あのね、これって何かの超常現象じゃないかな…って」

そう言った中川は恥ずかしいのか真っ赤になっていた。

「超常現象ね…」

「あゝっ、やっぱりバカだと思ったんでしょ。言わなきゃ良かった」

「いやいや、バカになんてしないよ。そういえば今朝のバスから変わったしね」

僕は言いながら朝の事を思い出していた。確かに僕達が降りる時、バスから運転手が消失していた。今となっては、そこから何かがおかかったとしか思えない。

「そうよ。運転手がいなかったし、ひよっとして、あのバスで私達違う世界に来てしまったんじゃない…」

「それはないと思うけどなあ。現に職員室とか、この体育用具室の物なんかは普段のままみたいだし。まあ俺達だけ人のいない別世界に送られたという可能性がない訳じゃないけど…」

と話している最中に中川の視線を感じ、僕は彼女を見た。

「どうしたの？ じーっとこっちを見て」

「ねえ三上君、ひよっとしてこういう話好きなんですよ？」

「え…いや。そんなことは…」

「隠しても無駄よ。話し方でわかるもん」

「えっ？」

「見てればわかるわよ。この話になつたら急に生き生きとしてきたから」

「そうかなあ……」

確かに指摘の通り、僕はこういった類の話には大変興味がある。

しかし、それを表立って表明するのは、「オタク」のレッテルを貼られそうで気が進まなかった。

「ひよっとして恥ずかしいの？もっとも私もさつき超常現象なんて言うのは恥ずかしかったけど」

そういえばさつき、中川も「超常現象」と言うだけで恥ずかしがっていた。でも彼女は僕の求めに応じて話した。僕も彼女の恋人を自認する以上、このくらいの事が言えなくてどうするのかと思えてきた。

「そうだよ。恥ずかしくてさ。なんかこうい話が好きなのよ」

「いいじゃない。それだったら私もオタクよ。オタクカップル成立かしら」

「オタクカップル？ははは、そりや凄いや。面白いね」

「でしょ、別に私達二人が気にしなれば何と云うことない事なのよ」

「言われてみれば……」

僕は聞いていて改めて中川の賢さに感心した。全ては考え方一つなのだ。今ここに二人だけいる僕と中川さえ良ければ、それでいいのだ。もちろん、僕が漫画やゲーム好きな事までわざわざ公表することはないが。

「わかったでしょ、オタク君。だから遠慮無く話を続けましょ」

「うへっ、オタク君か」

「そうよ。ねえオタク君、神隠しってあるじゃない？ああいうのかな……なんて風にも思っただけ」

「神隠しかあ。確かに大勢の人間が消失してるし……。神隠しと言え

ば、中川さんは神様って信じてる？」

「えっ？まあ…時々願を掛けたりするくらいだから、いて欲しいとは思っているのよね、たぶん」

「俺もいるって言い方はおかしいかもしれないけど、存在すると思っただよね。それがしつかりした姿を持つ者なのか、意識的な存在なのかはわからないけど…」

「ふふふ、専門家らしくなってきたわね」

「もう、茶化さないでくれよ」

「ごめんごめん。先生、続けて下さい」

「それでね、これもひよつとしたらそんな神の悪戯かな…なんて」

「そうね。神隠しって、神からしてみればかくれんぼみたいなものなのかもね」

「おそらく、神が存在するならば、何十億もの人間だって、駒を動かす将棋みたいなものなんだろうね」

「じゃあ、私達ってその中でも選ばれた二人という可能性もあるんじゃないかしら？現代の亚当とイブだったら素敵ね」

「そうか。そういう見方もあるのか。凄いね、中川さんは」

「ふふつ。三上君って凄いつて言葉が多いわね」

「えっ、そう？」

「あんまり大した事ないことまで凄いつて言われるから、気になつてたのよ」

「そう？何気なく言ってたなあ。気に障ったようならごめんよ」

「大丈夫、別に気にしてなんかないわ。好きな人の言動や行動って気になるものよ」

などと言いながら、頬を染める中川を見ていると、また愛しさが増す。僕は思わず背中から抱き締めた。

「選ばれた二人…いい響きだね。凄いよ」

「うふつ。また言ってる」

「わざとだよ」

「そう？」

「ああ。喜んでもらいたくて、わざと言ったんだよ」

というのは嘘で、実は無意識に口から出てしまったのだが。この際、このムードが保てればどちらでもいい。

しばらく沈黙が続いた。でも言葉のいらぬ沈黙だった。僕にもようやく黙っていてもいい時がある事が本当にかかった気がした。

僕は全裸の彼女の胸の辺りに腕を回し、自分の身に寄せつつ、彼女の髪の香りを楽しんでいた。

「ねえ？」

不意に中川が甘い声で囁いた。

「ん？どうかした」

「さっきの選ばれた二人で思い出したんだけど、これが二人同時に見ている夢って事はないかな？」

「二人同時に見る夢か。うん、あり得なくはないかもしれない。俺達ひよつとして両方共家で寝ているだけだったりして。いや、それなら単なるどつちかの夢って事もあるのか…？」

「どつちかの夢…。こんなにいろいろな事があつたのに、ただの夢ではないなんてことが？」

「ないとは言えない。俺、昔本当に夢で人間を殴つたと思つたら、部屋の壁だつたって事がある。夢と現実を混同してしまう可能性がないとは言えないよ」

「でも、私、確かに今まで男の人とこう…したことなかったのに、今日は確かに…」

喋っている中川の顔は火でも吹き出しそうにまた真っ赤っかになつていた。要は僕とSEXした事が過去に経験の無い事であり、肉体的現実感を伴っていた事もあつて、夢である筈はないと言いたいのだろう。

「それは俺も…。確かに今まで経験した事が無い事を今日体験した。俺が誰か過去の人間でもない限り、さっきの行為を知っている筈も無い」

どうもぼかして言わなければならぬところがもどかしい。今ま

で経験した事が無い事とは中川とのSEXであり、その中の様々な行為を指す。既に裸で下半身を結合させ合った仲とはいえ、女の前では大つぴらに表現し難いところに、人間関係ひいては男女関係の難しさがある。

「そうよね。お互い初めての事をしたんだから、それを知っている筈がないわ。そんな事を夢で見られる訳がないわよ」

「でも…」

僕には一つの疑念があった。

「DNAってあるよね。俺にも詳しくはわからないけど、遺伝情報というのがあったと思う。その中に、性行為を行う術が含まれていたらひよっとして夢で見ること可能かも…」

「そんな、嫌よ、これが全部夢だなんて…」

中川は自分で「夢かもしれない」と言っておきながら、それを否定している。結構、感情の起伏が激しい女だ。

「全部じゃなくても、俺達が現実と夢などの見境がなくなって混同しているっていう事もあり得るよ。行為していることの全てが現実とは限らないし、もしかすると俺達の見ているものが全て同じように見えているかどうかだって怪しいもんだし」

僕はたまにそう思う事がある。僕らの生きている世界の全てが現実なのか、皆同じものを見聞きしているのか、たまによくわからないくなる。

こういった考えを突き詰めていくと、自分が自分でない者のように思えてきて、外から別の意識で客観的に自分を見ているように感じる時がある。そんな事まで中川に言っていると、アホだと思われそうなので、黙っておいたけれど。

「嫌…、そんな風に思いたくない…」

「そりゃ俺だつてそうさ」

本当にそうだ。今日、幾多の苦難(?)を乗り越え、童貞まで捨てたというのに、また一からやり直しなんて考えたくもない。

「可能性だよ、可能性。これ程詳細な夢を二人同時、もしくは片方

だけが見るなんて事は、それこそ神でも関与してなきや無理だよ、きつと」

「そうよね。私、こんなに素敵な思い出、夢になんかしたくない」
中川の目は心なしに潤んでいるように見えた。こんな話をしていて、また心細くなってきたのかもしれない。

「ごめん。俺がちよつと調子に乗り過ぎたよ。もつと現実的な事を考えないか？例えば今日が日曜日だとか…」

と言ってから、それは今朝確認したことに気付いた。

「ちよつと待って！」

と叫んだ中川の顔が突然嬉々としたように感じた。

「日曜ではないけど、今日って何かの祝日かも…」

「今日って平日だよね…。それ以外に何か？」

僕には中川の言っている事の意味がさっぱりわからなかった。昼のワイドショーでやってる「今日は何の日、フッフ」なんて音楽が頭を流れるのが関の山だ。

「そうよ！」

と言うと、中川は僕の身体から離れて、自分のカバンに近付いて行った。そして中身を探り始めた。数秒後、彼女は一枚の紙切れを取り出して、また叫んだ。

「これよ！」

「何か嬉しい情報でもあるの？」

ちよつと緩慢な動きで近付いて行った僕に、突進するように中川は寄って来て、その紙切れを渡した。

「え〜っ！」

僕も思わず叫びを揚げた。

「創立記念日？今日ってそうだったの？そんなの聞いてないよ」

「私も最近朝遅かったから、ちゃんと聞いてなかったの…。だから今の今まで気が付かなかった…」

「そっか、俺がホームルームなんてちゃんと聞いている訳ないもんなあ…」

今更ながらに自分の遅刻癖が呪わしい。ちゃんとホームルームに出て、柳沢の下らない話を聞いていれば何という事もなかったのだ。だがよくよく考えてみれば、今日学校へ来た事は間違いではない。ただ、もし僕がホームルームにまともに出ていて今日が休みだと知っていたら、家で寝ていただけで終わっただろう。当然、中川とのHはなく、一人で中川を想像してHするのが関の山だっただろう。そう思うと、クラスメートの前で「めだかの学校」を熱唱したのもまんざら無駄ではなかったのだ。中川がどう思っているかはともかく、僕は今日のこの出来事を喜ぶべき人間なのだ。

「見て。一日掛けて電気工事を予定って書いてあるわ。それで電話も通じなかったのね」

中川が紙を指差してこちらへ見せる。

「でも、その割には工事する人間がいなかったよね」

「そうね。凄い暴風雨だったから、途中でそのまま切り上げちゃったのかしら……」

「まあ、いいか。何にしても原因はわかったし、僕らはこうして無事な訳だから」

僕はさっきの論理が浮かんだ以上、今の状況に何の不満もなかった。

「そうね。私も良かった。こんな風に三上君と一緒にいることが出来て……」

と言うと、彼女は目を閉じた。

「中川さん」

彼女がキスを待っているのだと思い、僕は顔を近付ける。

「美和って呼んで」

「美和……」

僕はちよつと照れながらも彼女を名前で呼び、唇を触れ合わせた。

「んっ……」

彼女の口から吐息のような声が漏れる。僕は何度も唇に吸い付き、軽い破裂音を立てた。

変だ。僕は違和感を覚えていた。何がというと、相手の唇から全くの味（という言い方も変だが）が感じられない。いや触感すらあるのかないのか感じ難いくらいだ。おかしい。どうなってるんだ、これは。

その21

僕は突然顔を逆さにして、中川の秘所にしゃぶり付いた。

「きゃっ、そんないきなり…」

彼女が悲鳴を揚げるものの、疑惑は確信に変わった。彼女のあそこから流れ出る汁からも全く味が感じられない。味覚がない、これは俺が味盲になったのでなければおそらく…

「夢だ、これはっ!」

僕は喘ぐ中川をよそに叫んだ。急に視界が全面的に白くなり、再び開けてきた。

「う、うん…」

僕は伸びをしていた。やっぱり夢だった。でも、

「う、うん…」

隣には今にも目を覚まさんとしている中川が確かにいた。それも全裸で。僕も自分の身体を見ると全裸だった。それも勃起のおまけ付き。ということは、SEXをしたのは現実であったと推測出来る。

「中川さん」

何処からが夢だったのだろう。さっきは「美和って呼んで」と言われたが、それも夢かと思うと、再び苗字で彼女を呼んでしまう。ところが、

「もう、美和って呼んでって言ったでしょ」

彼女は前と同じ事を言う。それもさっきの出来事があったかのよう。うに。

「いや、それは夢じゃ…?」

ひよっとして僕達は同じ夢を見ていたのか。

「俺は今、目が覚めたみたい。さっきそう言われたのは夢のような気がするんだけど…」

「えっ?夢…。私、確かに美和って呼んでって言った気がするけど、

あれが夢……」

「俺達、いつの間にか寝てしまっていたんだよ。ただ、それが何処からなのかがよくわからない」

「超常現象の話って覚えてる？それも私の夢？」

「いや、したよ。神隠しとか、選ばれた二人なんて話になって」

「その後、夢の話になったわ」

「俺達の記憶は一致しているみたいだね。それも同時に同じ夢を見たってことか」

「待つて。紙は、創立記念日の紙は……」

と言つと、中川は自分のカバンの所まで駆け寄つた。そして夢の時と同じように中を漁る。

「ない……。さつき見た紙がない……」

「えっ……」

「今日は創立記念日じゃない……。さつきのは夢……？」

「俺達の希望的観測が形成した幻覚だったっていうのか？」

確かに夢をコントロールする術があると聞いたことがある。オカルト的観測に流されるのが嫌で、僕達は良い方良い方へと夢のストーリーを作っていたのかもしれない。

「じゃあやつぱり私達、別の世界に来たなんて事も……」

中川の表情が強張る。確かに奇妙な事続きだ。女の子じゃなくても嫌な気分になる。

「中川さん、いや美和、抱き合おう」

唐突ながら僕は宣言した。

「えっ？」

「抱き合っていれば幸せな気分になって、不安も何処かへ飛んでいくよ。正直言つと、俺もちょっと気味悪くなってきたんだ。だから、今はくっついていたい」

「うん」

中川の返事を聞くと、僕は彼女の身体を引き寄せた。彼女の柔肌が触れると、また興奮してきて、キスしたり、触りたくなってくる。

この世に二人きり

「ちゅっ」

キスしてわかった。今度は夢じゃない。僕達はいっしょか夢中にな
って、お互いの身体を貪り合っていた。

その22

「あゝっはっはっは」

「うわゝっ、すげえ」

笑いと言嘆の聲が狭い部屋に響くのがわかった。目が開かない分、聴覚だけは異常に働くようだ。あまり聞いた事のないような声がざわざわと騒いでいる。ここには僕と中川しかない筈なのだが…。
眞実を見極める為、僕は目を開いた。

「げえっ」

僕は事態を知り、絶句した。体育用具室にはいつの間にか電灯以上の明るさの朝日が差し込んでいて、それと同時にNBA選手の格好を真似たような何名かのバスケット部員の視線が僕達二人に注がれているのだった。

こんな時ながらも、僕は一つ考えた。ひょっとしたらこれも含めて今までの事は全て僕の妄想なんじゃないか？妄想に浸り過ぎた僕は、全部自分の都合のいいように昇り降りのある話を作っていただけなんじゃないか？そして僕自身妄想と現実の区別が付かなくなっているんじゃないだろうか？例えば、実際僕はここに一人きりで、バスケット部はおろか中川すら脇にはいないのではないか？だが、
「どう…したの？」

寝惚け眼で僕の隣にいた中川が尋ねてくる。どうやら現実らしい。このまま目をつむっていた方が幸せだぞ、と言ってやりたくらいだったが、どうせ彼女も最後には現実を知ることになるのだ。結局無駄なことはやめた。

「えっ、何これ。どうなっているのっ！」

「うはっ、すっげえ。モロ見えだあ」

「俺、鼻血出そう…」

バスケット部員が中川を見て囁し立てる。

「いや…」

彼女は慌てて胸を隠す。だが、頭隠して尻隠さずではないが、逆に下半身が露出して、さらに観衆を喜ばせた。

「ス、ストリップか、こりゃ」

「脚開け、股開け！」

拍手や口笛も混じり、裸の僕達を囲む円陣が出来ていた。用具室のマットはストリップのステージさながら、僕と中川を見事なまでに衆人環視に晒していた。

「やめろ、おい、見るな」

僕は必死に中川を隠そうと頑張った。だが、それも下半身丸出しのオールヌード状態では全くの説得力がない。

「三上、お前チンコ出しながら見るなもねえだろ。ははははは」

「お前は散々見たんだろ？ケチケチしないで俺達にも見せてくれよ」嘲笑が裸の僕に次々に突き刺さる。これは言葉の暴力だ。とにかく早く服を着て、この場を離れたかった。その時、

「こらっつ。こんな所に群がって何やってんだ、お前達っ！ひよっとしてタバコでも吸ってるんじゃないだろうな？」

聞き覚えのある声が、用具室の入り口から聞こえてきた。

「先生、ちよつと見て下さいよ、これ」

部員の一人が、手招きする。来たのは予想通り、柳沢だった。

「なっ…、み、三上っお前、何やってんだ！」

柳沢は僕を一喝する。そして視線を移した奴は、中川にも気付いた。

「な、中川、どうなってるんだ、その格好は？ま、まさか…」

「先生、こいつらやってたみたいですよ」

部員の一人が横から口を出す。

「そ、そんな。三上お前っつ！」

柳沢の表情は怒りに燃えていた。無理もない、奴は隠れ中川ファンで、あわよくばモノにしてやろうと狙っていたくらいなのだ。今の辱めの中で、唯一爽快だった瞬間はこの時だけだ。あの職員室で見たノートからすると、奴の悔しさは相当なものだろう。

「バカもん！」

奴の右手が僕の頬を打った。罰と言うよりは怒りの度合がかなり強いように思えた。幸いにして、その後バスケット部員は

「お前達、出て行け」

と追い払われたけれど、僕は気が遠くなるくらい奴に何度もぶたれた。

意識が朦朧とする中で、僕達は服を着るように命じられ、職員室へ直行した。あまりにぶたれた為、説教がどのような話なのかさっぱりわからなかったが、停学処分をくらった事だけは理解出来た。

その23

結局、僕達が二人でいた日が何だったのかは未だにわからない。創立記念日ではなかったし、僕達は単に前日の放課後に体育用具室に忍び込んで不純異性行為に及んだという事に結論付けられた。

ただ、停学処分が解けた後にクラスメートに聞いた話によると、僕も中川もその日は無断欠席したとの事だった。服部も言っているので間違いない筈だ。

僕達は同時に同じ夢を見て、夢遊病のように体育用具室に来てしまったのだろうか？確かに後で見たら、体育館の屋根に落雷による影響でぼっかり大きな穴が空いていたので、それを見た僕達が体育館に来た事は間違いないのだろうか…。

ただ一つ、中川も僕と同様に妄想癖がある事がわかった。僕達は停学処分中は我慢したものの、それ以後は交際し、サルのようにSEXもこなした。そして付き合っている内、段々と彼女の性格も見えてきた。話していると、中川は結構夢見がちで、妄想に浸りやすい性質の人間だというのがよくわかった。さすがに一人Hをしていたかなんて事は教えてくれなかったが（もし以前にしていたとしたら、想像上の相手は服部だったのかもしれない）、常日頃から都合の良い事を頭で考えて楽しんでいるのだそうだ。二人の妄想が絡み合い、このような事態を引き起こしたと考えられなくはない。

そして、僕達はあの日間違はなくSEXをしたのだ。その証拠に中川からある日

「ねえ、話があるの」

と言われ、聞いてみると妊娠したとの事だった。それも停学期間を考えると、仕込んだ日はあの日しかない計算になるのだった。

「ほ、本当なの？」

聞いた瞬間、僕の目の前は真っ暗になりそうだった。

「嘘なんて言っても仕方がないじゃない。これ診断書よ。よろしく

ねパパ」

そう言っただけで彼女は僕に一枚の紙を差し出した。紛れもなく、産婦人科の診断書だった。

「パパ……」

僕はひよつとして彼女の想像妊娠ではないかとも疑ったのだが、現実と認めざるを得ないようだった。勿論、中川の事は好きだ。だが、まだ高校生の僕が一児の父親なんて、考えた事もない。自分すら持て余している僕が、どうやって子供なんて育てたら良いのだろうか。

「私、産むつもりだから」

彼女は僕にそう告げた。その決意の眼差しは、逆に僕を混乱の渦に落とし込んだ。交際以来、順調でありすぎた気がしなかったのだが、徐々に強烈な腹痛が襲ってきた。

「ちよつと考えさせてくれよ……」

僕はそう言っただけでその場から逃げた。勿論行き先は男子トイレである。

その23 (後書き)

最初の時点で「修正しつつ書く」と書きましたが、一度書き上げたものを修正するというのはなかなか難しく、ほとんど手を加えられませんね。

次回最終回で、若干、尻切れ気味のラストなのですが、ほぼそのまま載せることになりそうです。

この世に二人きり

その24(前書き)

最終話です。

それから僕はまたしばらく腹痛が続いた。中川の妊娠を知らされ、どうしたら良いのかわからず、考えもまとまらない。彼女や子供の事を思えば必ず腹が痛くなった。まるでパブプロフの犬みたいに、その事を考えるだけで大便が出そうになってくる。

その内、学校へ行くのも億劫になってきた。どうせ両親も心配などしていないので、勝手にサボる日も増えた。そんな時は中川から何度も電話が来ているのだが、出る気もせず、一人で楽しい妄想に耽った。中川と会いたくなかったので、極力顔を合わせないようにし、妄想では違う女を抱いた。現実逃避も甚だしい状態だ。

そんな僕は若年性アルツハイマーでもないのだから、何となく物忘れが激しくなり、いつしか現実と妄想の区別も付きにくくなってきた。学校へ行っても都合の良い妄想に耽る時間が増え、知らず知らずの内に性器に刺激を加え、ついに授業中に射精までしてしまった。柳沢からは立たされたり、

「頭を冷やして来い！」

と怒鳴られる始末だ。友達だった筈の服部まで、僕を白い目で見始め、避けるようになった。そして中川に会えば、即座に腹痛が起きて、トイレへ駆け込む他ない状態だった。

そんな状態を繰り返すと、気付いた時には何故か学校が変わっていた。『R-1メンタルスクール』なんて横文字の学校に知らない内に転校させられていて、柳沢の奴が何か仕組んだのではないかと、最初は恨んだものだ。

でもそうではなかったようで、少しすると、中川も転校してきた。こんなストーリーカーまがいの行為をするなんて、彼女は余程僕の事が好きなのだろう。

「私、産むからね。産むからね」

とオウムのように繰り返されると、僕はウンザリしてくる。

「ほら見て、このお腹」

と彼女は他の生徒がいる前でへソまで見せる。その割には腹が膨らんでいないような気もする。何だか彼女も現実と妄想の境がないように見えた。

僕も彼女も、あの日に全てが狂ってしまったのだろうか…。

こうなった今、全てが夢や妄想であればどんなに嬉しい事かと思うのみだ。その可能性だってない訳じゃない。

僕達の認識している何処までが現実かなんて、誰にもわからないのだ。ひよつとしたら僕こそ神で、全部僕の脳が作り出した仮想世界でしかないかもしれない。

いや、そうだ。妄想の世界なら自由に動かせる僕は、神にも等しい存在なのだ。いつそのこと、こんな世界からは抜け出して、新たな妄想の旅にでも出るとするか…。

その24（後書き）

昨日も書きましたが、昔に書いたものを修正するって難しいですね。尻切れっぱい所を直そうかと思いましたが、その時に集中してやらないと、なかなか気持ちも入らないですね。結局、ほとんど直せませんでした。

何にしても、読んで下さった方、一言でも、酷評でもいいので、御感想を頂けると幸いです。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1026e/>

この世に二人きり

2009年3月24日09時10分発行